

みんなくりポジトリ

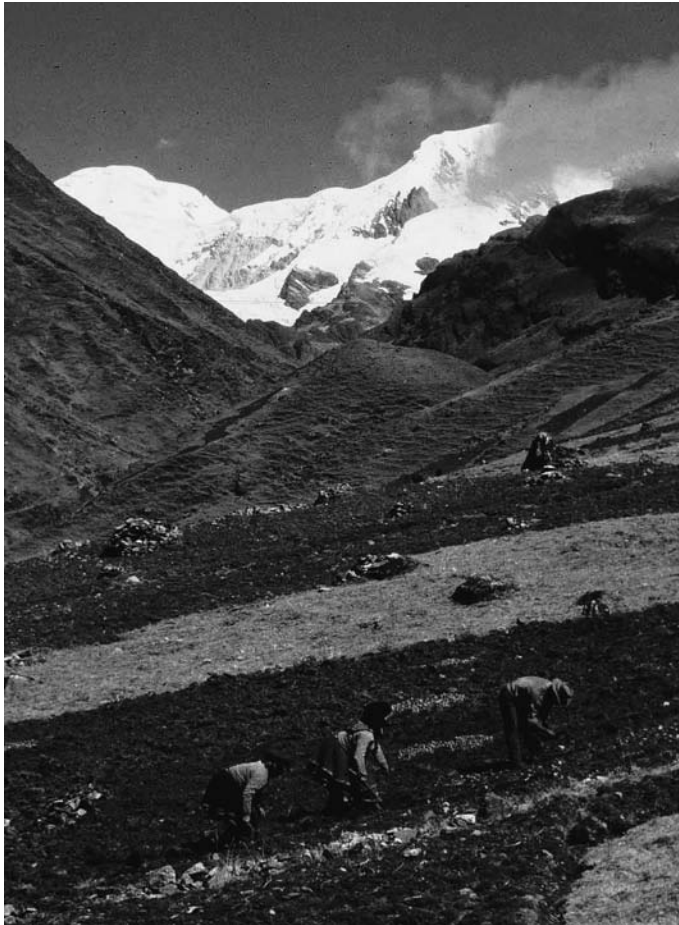
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

第6章 農牧民の民族誌的研究： 食糧の生産と消費を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008940

第6章 農牧民の民族誌的研究

—食糧の生産と消費を中心に—



標高4000mあまりの高地でもジャガイモを栽培している。後方の雪山はアウサングアテ山群（ペルー・クスコ県マルカパタ村）

1 はじめに

冒頭で述べたように、私がアンデスで調査を始めたのは1968年のことであったが、それ以来、アンデス各地を何度も訪れて大変驚いたことがある。それは、前章で述べたインカ時代の農耕文化の伝統がよく保持されていることであった。とくに、ペルー南部からボリビア北部にかけての高地部でその傾向が強かった。たとえば栽培されている作物の中心はジャガイモやオカ、オユコ、マシュア、キヌアなどアンデス高地原産のものが多く、そして栽培する農具もインカ時代以来使われている踏み鋤や手鋤を使うところが多い。また、飼育されている家畜もリヤマやアルパカ、さらにクイなど、これらもインカ時代以前からのアンデス高地原産のものである。

もちろん、インカ帝国滅亡後500年近くたった今ではスペイン人たちによる影響も大きく、それについては第2章で指摘しておいた。しかし、私の観察によれば、地域によってインカ時代以来の伝統的な色彩の濃い農耕文化を観察できるところもありそうであった。そのような地域は、大体において交通が不便で地理的に隔絶したところとなっているが、そこで先住民の人たちと暮らしをともにして長期にわたり調査することによって、アンデス高地における伝統的な農耕文化の特色の一端を知ることが期待できそうであった。

そのような期待をもって、私が民族学の調査対象とした地域が、ペルー南部高地のクスコ県 (Departamento de Cuzco)、キスピカンチス郡 (Provincia de Quispicachis) のマルカパタ地区 (Distrito de Marcapata) であった。クスコは、いうまでもなくかつてのインカ帝国の中心地であったところであり、マルカパタ地区はこのクスコの町から直線距離で東に約100kmのところ position している (図6-1)。ただし、クスコからマルカパタに通じる定期的な交通の便はないので、そこへ向うためには不定期に通うトラックに便乗させてもらうしか方法はない。また、その道路はほとんどが急な斜面につけられた山道の悪路であり、クスコからマルカパタまでは運が良くても丸1日、しばしば2~3日を要する。とくに、雨季は崖崩れなどのために通行不能になることも珍しくない。このような道路事情もあって、クスコ地方のなかでもマルカパタ地区は地理的に隔絶されたところになっている¹⁾。

調査は、マルカパタ地区の中心地である標高約3100mのプエブロ・マルカパタ (Pueblo Marcapata) を基地として、1978年10月から1987年10月までのあいだに通算で約2年間定住しておこなった。調査の焦点はマルカパタ地区の農耕文化、とくに食糧の生産と消費である。ただし、農耕文化は自然環境や社会組織とも密接な関係をもつと考えられたため、これらの特色の把握にも努めた。すなわち、環境の調査では高度の異なる5地点で植生調査を実施したほか、地形や植生の一般観察もおこなった。また、栽培植物も腊葉標本を作成、トウモロコシとジャガイモは生標本を採集した。これらの標本の同定は、

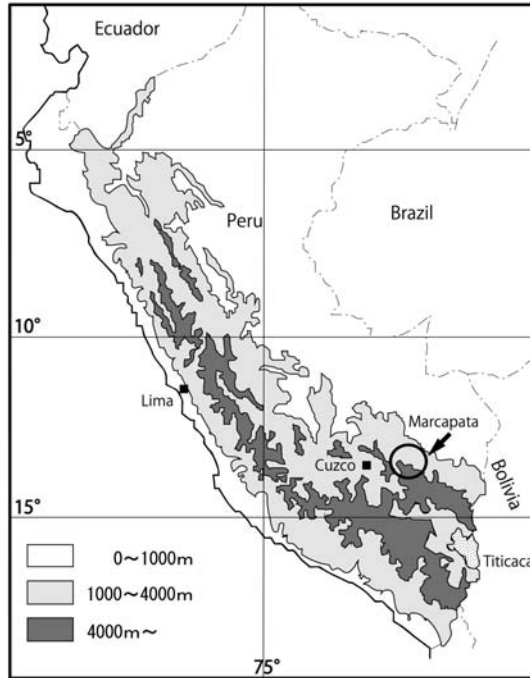


図 6-1 マルカパタの位置

栽培植物の大半は私が、一般植物は Cesar Vargas 元クスコ大学教授（植物学）がおこなった。また、ジャガイモの染色体数の同定はリマ（Lima）の Centro Internacional de la Papa（国際ジャガイモ研究センター）の岩永勝研究員に依頼した。気象データについては、前記プエブロおよび標高約3800mのチュンピパタに自記温湿度計を設置、気温や湿度、さらに雨量なども記録した。

民族学的な調査は、先述したプエブロで約1年間、ケチュア語を母語とする先住民が多く住む標高4000m前後の高地で約1年間定住しておこなった。このうち、プエブロでは保健所の一室で過ごしたが、高地部では先住民の家で居候生活をさせてもらい、農耕や食生活に関する参与調査を実施した。その後も調査を継続する予定であったが、ペルーにおける治安状況の悪化により、調査は不可能になった²⁾。そして、治安が好転した2000年代に入ってから短期間ではあったが、数回にわたり補足調査をおこなった。しかし、残念ながら当該地域における状況は大きく変貌していた³⁾。したがって、ここで報告するのは基本的に1980年代末までの観察に基づくものである。

2 マルカパタの自然環境

2.1 地形

マルカパタの領域は、標高6336mのアウサンガテ (Auzangate) 山を主峰とするビルカノータ山群のすぐ北側からアマゾン川の源流のひとつマルカパタ川上流の流域に広がる地域である (図6-2)。その領域の南はアウサンガテ山群の氷雪地帯によってカンチス (Canchis) 郡とへだてられている (写真6-1)。その東西も、この山群の西端および東端部からほぼ北にはりだす尾根によって、パウカルタンボ (Paucartambo) 郡やキスピカンチス郡のオコンガテ (Ocongate) 地区、さらにプーノ (Puno) 県などと区切られている。

すなわち、マルカパタはアウサンガテ山群に三方を囲まれたアンデス東斜面の谷に位置している。その低地部はアマゾン源流のひとつ、イナンバリ (Inambari) 川の一支流であるマルカパタ川の中流域までである。したがって、マルカパタはマルカパタ川の上・中流域地域に広がる地域で、村役場の資料によれば面積が約2000km²、高度域は標高約1000mの低地から標高5000m以上の高地にまでおよぶ。

このマルカパタ川は、標高2000mから3000mあたりで4本の支流にわかれている。これらの支流は、いずれも河川の急流によって、山地が侵食されてできた急峻なV字谷を形成している。またその谷は、標高約4000m以上のところでは、例外なく山腹が氷食されてできたU字谷となっている。集落のほとんどは、これらの谷間や山腹斜面に位置しており、標高約1000mくらいから4000mあまりまでの高度域に散在している。また、

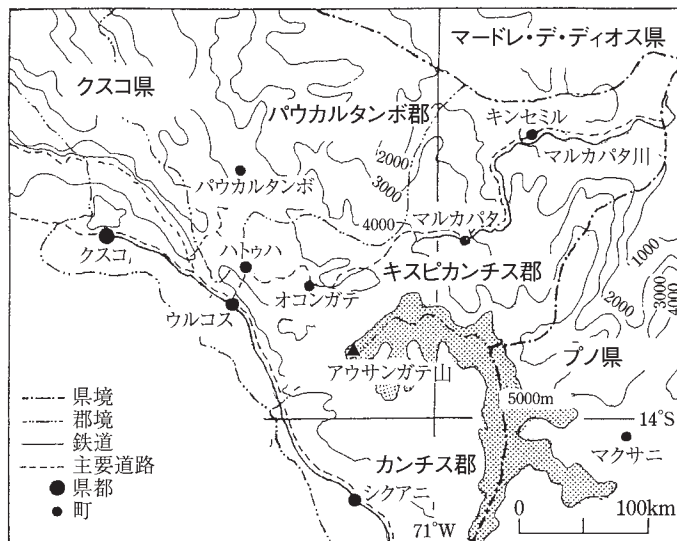


図6-2 マルカパタとその周辺地域



写真6-1 アウサンガテ山 (6336m)。マルカパタは、この雪山の向こう側に位置する

これらの集落のほとんどは地形的にはアンデス山脈の東側に位置しており、それが後述するようにマルカパタにおける生業の方法を特徴づけている。

しかし、マルカパタの集落のなかでワラコニ (Huaracóni) だけは地形的にも生業のうえでも唯一の例外となっている。先に述べたように、中央アンデスはいくつもの平行する支脈にわかれているが、それはペルー南部あたりで東・西の平行山脈となる。その中央部は、一般にプナと呼ばれる標高4000m前後の広大な高原となっているが、ワラコニはこの高原の東端部、東山脈の西側に位置しており、マルカパタの他の集落とは標高5000mに近い峠によって通じているのである。

このような地形条件のために、マルカパタ内の交通手段はきわめてかぎられたものとなっている。先述したように、マルカパタへはクスコから自動車道路が通じているが、これはウルコス (Urcos)、オコンガテ (Ocongate)、キンセ・ミル (Quince Mil) を経てブラジル国境近くのプルト・マルドナドに至るもので、これに以外に自動車道路はない。この幹線道路を除けば、あとはすべて徒歩にたよらなければならない。しかも、谷が深い、急峻なV字状であるため、この徒歩交通のための山道も、尾根をへだてた、2つの谷の間をむすぶものは発達しておらず、ほとんどが谷内での上下方向の山道にかぎられるのである。

したがって、これらの谷と谷の間を移動するためには、一部地域を除き、マルカパタ川との出合いまで谷を下って、そこからあらためて登るか、あるいは谷の源流部まで登り、そこから尾根を越えて、目的の谷を下るしか方法がない。いずれにしても、標高差で1000mから2000mもの山道を徒歩で上下することになる。ちなみに、マルカパタの中心地のプエブロからプナに至る1000mほどの標高差は、最短距離でも私の足で約10時間を要した。

2.2 気候と植生

第1章で述べたように、中央アンデスは、アンデス山脈の西側と東側とで対照的な景観を示し、太平洋岸は海岸砂漠地帯、アマゾン源流域は熱帯降雨林地帯となっている。これは、主として大西洋側から吹く湿気を含む貿易風がアンデス山脈によってほとんど遮断されるためである。したがって、アンデス東斜面に位置するマルカパタは全体的に雨の降りやすい地域といえるが、その領域が標高1000mのアンデス山麓の低地部から山頂部の氷雪地帯までの幅広い高度差を有しているため、高度によって気候および植生には大きな違いが見られる。この地域の気象については、長期的なデータは得られなかったが、キンセ・ミル、プエプロ、チュンピパタの3地点のデータから、幅広い高度差をもつマルカパタ地域のおおよその気象条件について知ることができる(表6-1)。

まず、キンセ・ミルはマルカパタの領域の最下部に近い標高600mあまりの低地に位置しており、その年間降雨量は6000mm以上に達し、平均気温は1年を通じて20度C以上、湿度も90パーセント前後で、高温、多湿、多雨という熱帯低地の特徴的な気候を示している⁴⁾。そのため、植生的には、このキンセ・ミル付近は典型的な熱帯ないしは亜熱帯降雨林地帯となっている。マルカパタの領域は、標高約1000mのサン・ペドロ(San Pedro)村から始まるが、このあたりも、樹高30mくらいに達する喬木が多く、まだ亜熱帯低地に特有の降雨林的な景観を示している。

この森林は、高度をますにつれ、次第に構成樹種が変化し、樹高も低くなって、亜熱帯山地降雨林的な景観を示すようになる。それは標高2400m近くまでつづき、標高2400m

表6-1 ペルー南部3地点の気象条件

キンセ・ミル (Alt. 620m)*					プエプロ (Alt. 3100m)					チュンピパタ (Alt. 3800m)**			
月	平均気温	最高平均気温	最低平均気温	雨量(mm)	月	平均気温	最高平均気温	最低平均気温	雨量(mm)	月	平均気温	最高平均気温	最低平均気温
1	23.0	28.1	19.6	835.3	1	9.4	13.9	7.4	264.1	1	6.4	9.8	4.3
2	22.8	27.7	19.7	740.8	2	8.9	13.4	6.7	321.3	2	6.3	10.5	3.8
3	23.1	28.2	19.5	656.8	3	10.5	15.1	8.2	222.5	3	5.9	9.8	3.1
4	22.7	28.1	19.1	451.4	4	10.8	14.9	9.1	119.8	4	4.3	8.3	2.0
5	22.1	27.1	18.6	330.4	5	10.7	15.6	8.4	27.1	5	4.4	10.7	0.7
6	21.1	26.2	18.0	367.9	6	8.6	12.5	5.9	10.9	6	1.2	8.8	-2.3
7	20.7	25.8	17.0	325.2	7	7.3	13.5	3.4	6.8	7	3.8	11.8	-1.1
8	21.3	27.1	17.7	314.2	8	9.2	13.7	6.7	67.0	8	3.0	9.0	-0.4
9	22.7	28.7	18.3	329.8	9	8.8	14.1	6.0	38.3	9	6.1	12.3	1.2
10	22.0	28.6	19.1	606.6	10	9.7	14.0	7.2	139.6	10	6.2	11.1	3.0
11	23.2	28.5	19.3	549.6	11	9.6	14.7	7.4	305.9	11	6.4	10.7	3.7
12	22.9	27.8	19.6	901.2	12	9.7	15.2	7.0	175.2	12	6.8	11.9	4.2

* Servicio Nacional de Meteorología e Hidrologíaの資料 [1964-1976] に基づく。

** チュンピパタにおける雨量は測定できなかった。

の集落のコチャ (Cocha) 周辺では、まだアマゾン源流域などの低地部に特徴的なウロギ科 (Araliaceae) の *Oreopanax* sp. や *Irespanax* sp. が見られる。

つぎに、標高3100mでの観測データを参考に、プエブロ付近の様子を概観して見る。この表によれば、プエブロではキンセ・ミルに比べ、雨量は1/5ほどで、気温は約10度C低く、月平均気温の年較差は小さく、年平均気温は11~12度Cである。また、雨量は5月から9月にかけての5カ月間は70mm以下の乾燥月がつづく。

このため4月から9月頃までが乾季 (現地では *chirau* と呼ばれる)、10月から翌年の3月頃までが雨季 (*poqoy* と呼ばれる) である、とされる。なかでも1月から3月までは最もよく雨が降り、とくにこの時期は現地の人たちによってママポコイ (*mamapoqoy*) と呼ばれる。

このプロブレ付近を特徴づけるのは深い霧である。雨季には数m先にいる人さえ見えないほど濃い霧のことも珍しくない。そのためプエブロ付近はきわめて湿度の高い地域である。私がプエブロで得たデータによれば、11月から3月にかけての雨季の湿度は95パーセントをほとんど下ることがなく、また乾季でもきわめて霧が発生しやすい。ここが、アンデス東斜面特有の雲霧林層に位置しているからである。

このような特徴をもったプエブロ付近の植生は、一般にセーハ (*ceja*)、もしくはセーハ・デ・モンターニャ (*ceja de montaña*) と呼ばれる雲霧林を形成している (写真6-2)。そこでは樹高10~15mくらいの木がかなり密生していて、その樹冠および幹がコケ類、着生ラン、パイナップル科の植物などによっておおわれたモス・フォレスト的な森林を形成している。マルカパタでは、この雲霧林帯は標高2500~2600mあたりからあらわれ、3000m前後で卓越し、標高3200~3300mあたりまでつづく。

ただし、この雲霧林帯あたりから谷の斜面を利用した大規模な階段耕地、アンデネス (*andenes*) があらわれてくるため、現実の景観としては谷の南北両斜面できわだった対照を示す。すなわち、南向きの斜面は典型的な雲霧林を形成しているが、北向きの斜面は全面が耕地として利用されているのである (写真6-3)。この雲霧林が卓越している標高3100mの高度はマルカパタの中心地である、プエブロが位置しているところであり、また主作物であるトウモロコシとジャガイモ栽培ゾーンの境界となっている重要なところである。したがって、プエブロ周辺部については、以下に少し詳しく見ておきたい。

プエブロは東にはりだす尾根上に位置する集落であり、ケチュア語でも町や村を意味するヤクタ (*llacta*) と呼ばれる。そして、この尾根の両側にもやはり東西に走る大きな尾根があり、そこは南北両側にそれぞれ小さな谷をへだてて、大きな斜面が迫っている。そして、これら2つの斜面が、まったく対照的な景観を示しているのである。図6-3はこれを具体的に示したもので、この図でアラス (*Araz*) 川をへだてて、相対する2つの斜面も景観的にはかなり違っている。アラス川の右の斜面は、先述した自動車道路が横切っており、現在一部に耕地が見られるものの、大部分は道路開通後放棄された耕地で



写真6-2 セハ・デ・モンターニャの植生（標高約3100m）



写真6-3 耕地として利用されている北向きの斜面（標高約3100m）

あり、現在は森林となっている。そこでの構成樹種を見ると、*Brachyotum quinquenerue* や *Micohia* sp. (ノボタン科)、*Baccharis genistelloides* (キク科) 等の灌木ないしは小灌木がほとんどである。一方、左岸の雲霧林は *Polylepis racemosa* (バラ科)、*Fuchsia* sp. (アカバナ科) などが見られ、また直径40~50cmに達する木も多く、極相林であると考えられる。つまり、前者は2次植生であり、後者はほとんど人手が加わっていないことをよく示している。

トウモロコシやジャガイモの耕地があるところは北向きの斜面で、インティチョッカ (*intichoka*) と呼ばれる。インティとは太陽のことで、これは陽あたりの良い部分を指している。いっぽう、雲霧林の見られるあたりはソカ (*soka*) と呼ばれる。寒さのために何もできないところである。また、このソカの下部、アラス川流域の平坦地も、やはり寒さのため、草地帯となっていて、この部分はカチュバンバ (*kachubamba*) と呼ばれる。バンバ (*bamba*) は、なだらかな平坦地をさす地形的概念で、カチュ (*kachu*) は雑草であり、雑草しか生えない平坦地、というような意味である。とにかく、このようにプエプロ付近では斜面の方位が農業に大きい影響を与えていることがうかがえる。

雲霧林の上限は谷によって若干異なるが、おおよそ標高3300m~3400mあたりである。この標高付近から、樹高がせいぜい1~2m程度の灌木ないしは小灌木がめだつようになる。*Baccharis* sp., *Chuguraga* sp. (キク科)、*Brachyotum* sp. (ノボタン科)、*Berberis* sp. (メギ科) などの灌木である。これらの灌木類は標高3800~3900mくらいまで見られるが、そのような高地では乾燥と低温のため、その分布は川の流域などにそった窪地状の谷間に限定され、その周囲は草原地帯となっている。

このあたりの気象条件を、チュンピバタ (標高3800m) のデータを参考に見てみよう。気温は低く、とくに5月から8月にかけての乾季は最低気温が氷点下になる。また、この時期の気温の日変化は大きく、20度C近くに達し、熱帯高地特有の特徴をよく示して

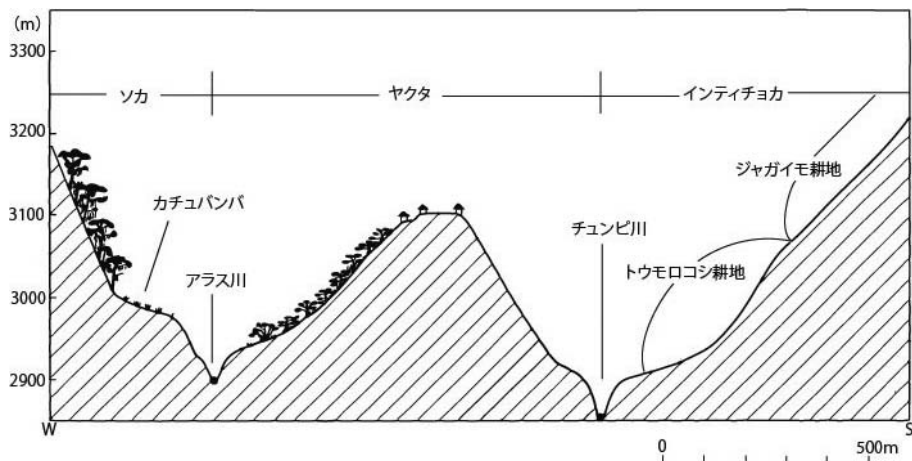


図6-3 プエプロ・マルカパタ周辺部断面図

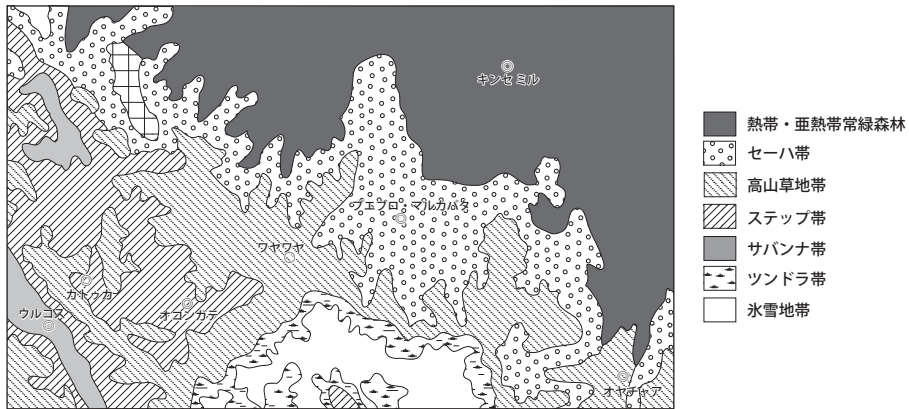


図6-4 マルカパタおよび周辺部の植生

いる。また、キンセ・ミル、プエブロのデータとの比較から、アンデス東斜面に位置するマルカパタは、低地部から高地部へゆくにつれて、降雨量が減少し、降雨量の多い雨季と少ない乾季に明瞭にわけられるようになり、気温についても低くなるだけでなく、日較差が大きくなる、などの傾向がうかがえる。

さて、草地帯は、地形との関連でいうと、V字谷からU字谷にかわるあたりからである。したがって、まばらに灌木のはえる狭い谷をつめてゆくと、急に谷がひらけて草地帯となる、といった景観である。標高4700~4800mまでつづく草地帯は、4400~4500mあたりの標高で2つにわけられるようである。イチユ (*ichu*, *Stipa* spp.) というイネ科の植物が優占する4400~4500mまでの高度域、そして4700~4800mまでの *Luzula* sp. (イグサ科), *Alchemilla* sp. (バラ科), *Nototriche* sp. (アオイ科) などの高山植物が優占する高度域である。マルカパタで、これ以上の高度をもつところはアウサンガテ山群周辺のみで、そこは標高5000m前後のツンドラ地帯と氷雪地帯となっている。

したがって、図6-4に示したようにマルカパタには熱帯降雨林から氷雪地帯までの様々な植生が見られるのである。

3 マルカパタの概況

3.1 マルカパタの歴史

マルカパタの歴史については、ほとんど史料が得られないので詳細は明らかではないが、マルカパタの各地に遺跡が見られ、村びとによれば、それらはすべてインカ時代、もしくはプレ・インカ時代のものであるとされる。実際に、これらの遺跡からはインカ時代の土器片や金属製品が見つかった (写真6-4)。これらの事実、さらに次の史料から、インカ時代にはすでにマルカパタに集落があったようである。16世紀の年代記作者、シエサ・デ・レオンの記録のなかに、次のような記述があるからだ。



写真 6-4 マルカパタで出土したインカ時代の金属製品

「(インカ帝国10代目の王) インカ・ユパンキは、東方の、数日の行程のところ、人口の多い大きな地方があるという、耳よりの情報を得て、彼はそれを発見したいと思い、前進した。しかし、クスコでなにか暴動が起きたという報告を受けたので、マルカパタという町に到着していたが大急ぎでクスコに戻り、そこに数日留まった」。[シエサ・デ・レオン 1979 (1553): 234]

この記述どおり、マルカパタはまさしくクスコの「東方の、数日の行程のところ」に位置している。したがって、この記述から判断すると、インカ時代には、すでにマルカパタには町があり、またインカ帝国の中心地クスコとも何らかの関係をもっていたことがうかがえる。ただし、この記述に見られる「マルカパタという町」が現在のプエブロであるかどうかは不明である。プエブロの東側 4 km ほど、谷をひとつへだてた尾根上に、村びとたちがインカ時代の集落跡だとする遺跡があり、これがシエサの述べた町であった可能性もある。

その後、土地の所有権を示す登記証のティトゥロ (titulo) には、1623年にすでにマルカパタの土地の境界が明示されており、その領域は現在のマルカパタ地区にほぼ対応している。比較的最近の大きな変化は、自動車道路の開通のようである。村びとの話によれば、1937年か1938年、クスコからウルコスを経て、キンセ・ミルに至る自動車道路が開通したとされる。それまでは、プエブロからウルコスまで徒歩で1週間も要したといわれるが、現在はトラックでふつうなら1日ほどになった。この道路開通はマルカパタからクスコなどの都市部へのアプローチを容易にただけではなく、都市部からの物や人の移動も容易にした。その結果、一部地域では経済的・社会的変化を引き起こしている。

その最も顕著な例は、この自動車道路ぞいの低地部である。ここは、この道路開通後、プーノ、シクアニ (Sicuaní)、クスコなど、マルカパタ地区以外の地域から移住してき

た者たちで占められている。しかし、彼らは社会的・経済的に、マルカパタの住民とほとんど関係をもたないため、その影響は最小限にとどまっている⁵⁾。この自動車道路の開通はプエプロの住人にもかなりの影響を与えたが、それは次節以下で述べることにする。

いずれにしても、この自動車道路には不定期に通う乗り合いトラックしかなく、先述したように雨季にはしばしば通行不能となる。また、マルカパタの農牧民の居住地の大半は、この自動車道路からも徒歩で1～3日の距離に散在しており、それらは現在なお隔絶された地域となっていることにはかわりはない。

3.2 共同体と集落

先に、マルカパタ地区の領域面積は約2000km²、人口が約4000人と述べたが、この人口についてももう少し詳しく見ておこう。幸いに、私の調査中の1981年7月12日に国勢調査がおこなわれ、それによって具体的な人口が明らかになった。それによれば、この時点でマルカパタ全体では男性が2108人、女性が1981人で、総人口は4089人であった。

ただし、行政的にはマルカパタ地区 (Distrito de Marcapata) は、さらに4つの地域に分けられる。すなわち、マルカパタ・コヤナ (Marcapata Collana, 以下ではコヤナと略称する)、プイカ (Puica)、サワンカイ (Sawancay)、コヤスーヨ (Collasuyo) の4つのコムニダ (Comunidad) である。これらの4地域は、Comunidadと呼ばれていることでも明らかのように、単に行政上の区画であるにとどまらず、それぞれが村落共同体的な性格をもっている。

実際、マルカパタの住人の表現によれば、マルカパタはタワンティン・アイユ (tawantin ayllu: 4つのアイユ) からなっており、共同体はアイユである、といわれる。アンデス村落の構成単位であるアイユ組織は、その起源をインカ時代にまでさかのぼって求めることができ、現在もアイユはその地域の住民の第一次的生活領域として意識され、保持されている。

マルカパタの場合も、共同体ごとに、守護聖人もしくは主要聖人 (Patrón Santo) を祭祀している。また、毎月末に各共同体で共同体の集会、アサンプレア (asamblea) がおこなわれ、それに出席することが共同体の構成員であるコムネロ (comunero) の義務とされる。この集会では、共同体にある道路や学校などの補修に対する共同労働の日程や役割などが決定される。さらに、後述するように共同耕地の管理、運営に際しても、共同体の規制が働いている。

また、共同体の境界を毎年定期的に巡回してまわるデスリンデ (deslinde) が比較的最近までおこなわれていた、とされる。デスリンデは、原則として共同体の成人男子全員が参加し、メスティーツは馬に乗り、インディオは徒歩で、食事を持ち、楽団をひきつけて、境界 (lindero) を見てまわる行事であった。これは、境界の不明確なところに石や土塊を置いてゆく作業で、ふつう数日から約1週間を要した、とされる。ときに、

この境界をめぐるデスリンデの最中にも、隣接する共同体の人間と激しい争いがおこったといわれる。これらのことから、マルカパタにおいても各共同体の領域はそこに成員権をもつコムネロにとって、彼らの生活領域として強く意識されていることがうかがえよう。

マルカパタの4つの共同体の領域は、基本的に川ないしは尾根によって、その境界が区切られている。コヤナの領域は、ラッコ (Lacco) 川左岸からチュンピ (Chumpi) 川流域にかけての地域である。サワンカイの領域は、このラッコ川とコヤスーヨ川で区切られている (図6-5)。コヤスーヨの領域は、コヤスーヨ川左岸から東部の地域にある。プイカの領域は、おおまかにいって、マルカパタ川とその支流、アラス川流域にあたる場所であるが、その領域は高地プイカ (Puica Alta) と低地プイカ (Puica Baja) の2つに分けられる。

高地プイカはアラス川上流域にあたる地域で、その下部は標高約3000mのところを位置するオビスパタ (Obispata, Upispataともいう) という集落から下は標高約2400mあたりまでの右岸がその領域となる。低地プイカは、標高2000mあたりから下部のマルカパタ川流域である。この低地プイカは、先述したように比較的近年になってマルカパタ以外の地域から移住してきた人びとが散在して住んでいる。この高地プイカと低地プイカの中間地帯にあたる、コチャ (Ccocha) からティオ (Tio) の集落までのマルカパタ川左岸は、コヤナの領域で、右岸はコヤスーヨの領域となっている。

先に地形のところ、マルカパタ川は標高約2000mから3000mあたりで4本の大きな支流にわかれ、その谷はいずれも深く、急峻であると述べたが、マルカパタの4つの共同体は基本的にこれらの谷や尾根にそって区切られているのである。そして、マルカパタ地区の境界は、三方がアウサンガテ山群およびその尾根となっていることから、これらの共同体はいずれもその領域の最上端部が標高5000mに達している。

一方、その領域の最下端部は、低地プイカをのぞくと、すべて標高2400mあたりに集中している。したがって、4つの共同体の領域は標高2400mあたりから5000mまでの少なくとも2000mあまりの高度差を有していることになり、各共同体の村落共同体的な性格を考えると、利用可能な高度域が等しいという点で注目に値する。

ところで、このような各共同体領域内に、プエプロを例外として数戸程度の小さい集落から50戸ほどの比較的大きな集落が散在している (表6-2)。国勢調査によれば、そのような集落がマルカパタ地区には65ある。この集落は標高約1000mのところから4300mあまりのところまで幅広く分布しているが、本稿で研究対象としている農牧民の集落のほとんどは約3000m以上の高地に位置しており、とくに約3500mから4000mあたりの高度域に集中している。

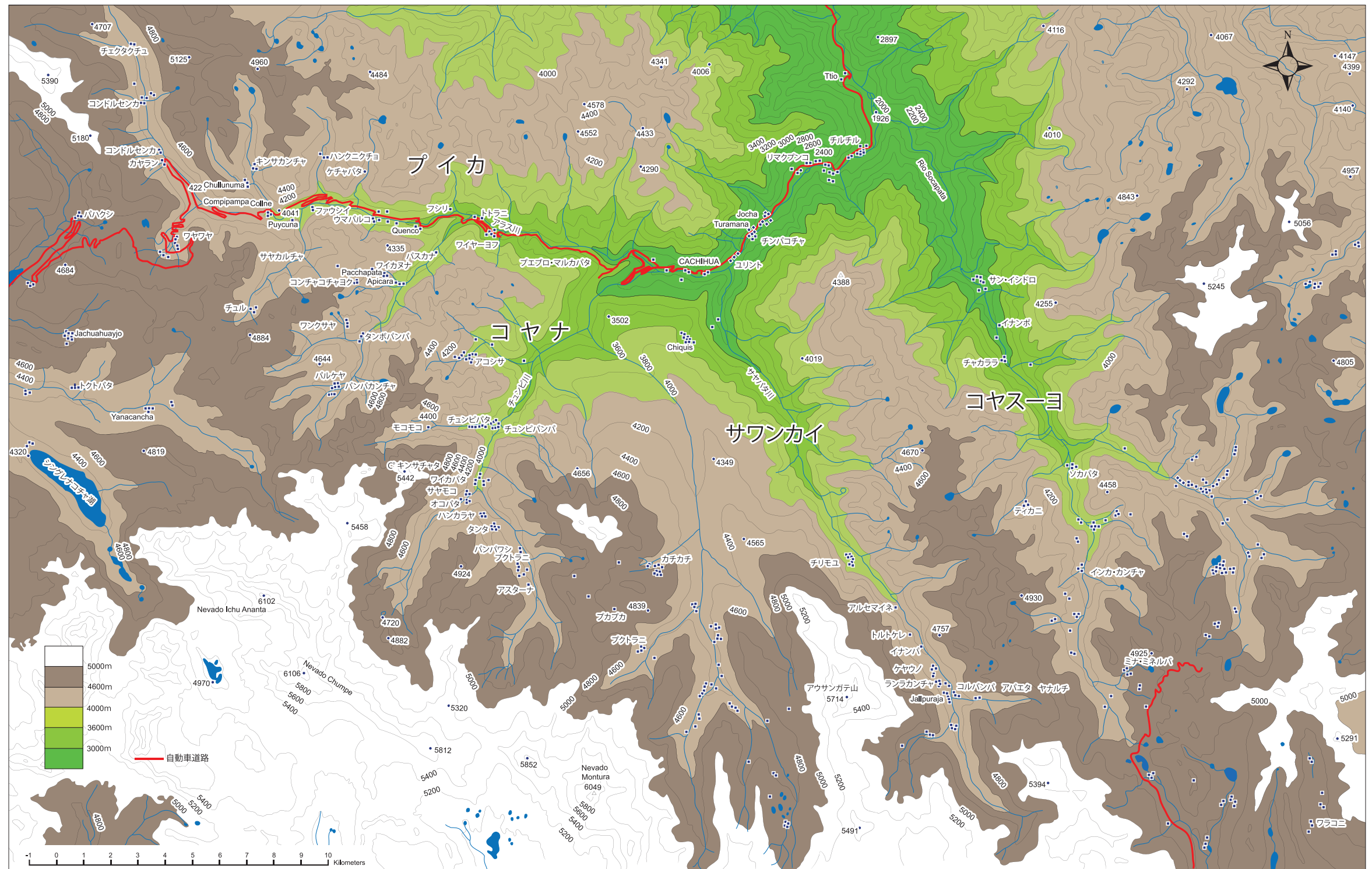


図6-5 マルカバタの4つの共同体と集落

表 6-2 マルカバタの集落と人口

	所属共同体*	集落名	家屋数	居住家屋数	世帯数	Total				
						男	女	0～14	15～64	65以上
1		Districto Marcopata	1,145	995	1,005	2,108	1,981	1,697	2,282	273
2	M	PUEBLO	121	82	92	182	178	163	181	16
3	P	ACOSITI	12	10	10	23	25	21	25	2
4	P	AMACHO	3	3	3	3	5	1	6	1
5	P	APICAEA	14	14	14	27	31	23	31	4
6	S	BAÑOS	8	8	8	13	17	12	16	2
7	M	CACHICACHI	5	5	5	11	10	9	11	1
8	M	CCACHI	13	13	13	26	27	22	27	4
9	S	CANCHAPATA	27	23	23	50	42	39	48	5
10	PB	CAPIRE	40	37	37	64	50	39	66	9
11	S	CANCHA CANCHA	5	5	5	13	10	9	13	1
12	S	CCANI MACO	16	15	15	30	32	22	34	6
13	S	CANCHALAYA	15	12	12	30	31	26	31	4
14	P	CCOCHA	10	10	10	28	21	23	23	3
15	M	COLLPAURC	5	5	5	8	10	8	10	0
16	S	CANCHAPATA	2	1	1	3	2	3	2	0
17	PB	CHAUPIGHACA	28	22	22	34	25	21	33	5
18	P	CHECTACUCHO	7	7	7	24	19	17	23	3
19	M	CHILECHILE	18	18	18	35	30	25	34	6
20	C	CHILIMOCO	22	22	22	57	52	58	40	11
21	S	CHIQUIS	53	51	51	109	100	93	108	8
22	M	CHUMPI PAMPA	35	28	28	67	55	52	65	5
23	P	CHUNO HUANKI	10	9	9	12	11	8	14	1
24	P	COCINE	24	24	24	51	46	38	55	4
25	M	COMUMPAMPA	9	9	9	8	14	7	11	4
26	PB	CULEBRAYOC	13	13	13	26	19	20	22	3
27	P	HUALCA HUALCA	25	25	25	53	53	39	59	8
28	S	HUNCARAYOC	11	11	11	21	15	9	23	4
29	C	HUARACCONI	48	46	46	87	97	77	95	12
30	M	HUAYLLAPATA	10	9	9	23	21	17	24	3
31	PA	HUAYLLAYOC	37	37	37	68	101	86	73	10
32	M	HUISCACHANI	13	13	13	33	30	34	25	4
33	C	INCA CANCHA	18	18	18	39	29	27	35	6
34	M	LACCO	50	41	41	87	81	71	87	10
35	S	LAURA PAMPA	1	1	1	3	4	5	2	0
36	S	CAYAMPAMPA	42	39	39	74	78	66	75	11
37	M	LIMAC - PUNCO	11	11	11	33	41	36	36	2
38	M	LIUPATA	5	5	5	15	16	15	15	1
39	M	MARCARANI	8	8	8	19	18	11	24	2
40	C	MACHACCMARCA	9	9	9	32	21	19	29	5
41	PB	MAMABAMBA	30	25	25	50	37	32	51	4
42	PB	MANCARA	10	10	10	24	14	18	19	1
43	S	MAYO BAMBA	26	11	11	26	21	24	21	2
44	P	PALQUELLA	13	13	13	24	31	20	30	5
45	P	PAMPA CANCHA	6	5	5	12	8	7	12	1
46	S	PARINA	19	5	5	8	6	4	9	1
47	M	PUCA PUCA	12	11	11	15	22	14	23	0
48	M	PUCUTONI	7	6	6	8	6	2	10	2
49	C	QUISPAQUIRA	4	3	3	13	13	12	11	3
50	C	QUIRAQUIRA	9	5	5	10	11	9	11	1
51	C	SAN ANDRES	14	14	14	34	34	28	35	5
52	C	SACCARARA	7	7	7	22	17	12	24	3
53	C	SAN ISDRO	19	19	19	65	46	47	53	11
54	C	SAYAPATA	12	12	12	22	23	18	23	4
55	C	SOCAPATA	16	6	6	15	9	10	13	1
56	M	RACCHIPATA	12	12	12	20	16	11	20	5
57	M	TANTANI	2	2	2	6	6	5	6	1
58	PA	TAMBO	7	7	7	13	12	14	11	0
59	C	TILLPA	31	31	31	55	43	34	51	13
60	M	THUNCOS	14	10	10	22	19	14	24	3
61	PB	TTIO	6	6	6	18	10	8	15	5
62	PA	UMAPARCO	18	18	18	37	43	31	45	4
63	PA	UPIPATA	3	3	3	7	6	9	3	1
64	PA	YANACANCHA	1	1	1	2	1	0	3	0
65	C	YANACCACCA	11	11	11	26	24	18	29	3
66	C	YANACCOCHA	28	18	18	25	28	20	28	5
67	S	YUNCAHUARO	5	5	5	8	8	5	8	3

*M: Marcapata Collana, P: Puyca, S: Sawancay, PB: Puyca Baja, C: Collasuyo, PA: Puyca Alta

3.3 ミスティとインディオ

前節で述べたように、4つの共同体は、すべて標高2400mあたりで、その領域の下部が接しているが、この近くにマルカパタの中心地のプエプロが位置している。そこは3本の大きな谷が合流するところで、しかもそれぞれの谷に各共同体の集落が散在しているため、プエプロはちょうど4つの共同体の扇のかなめ的なところに位置していることになる。マルカパタではプエプロだけが先述したようにケチュア語で町や集落を意味するヤクタと呼ばれ、他の集落は一般にアルデアまたはセクトール (sector) と呼ばれている。また、プエプロは戸数が100戸を超えた集村であり、人口も約350人と多く、この集落のもつ特異な性格がうかがえる (写真6-5)。

「ペルー・ケチュア地名事典 (Topónimos Quechuas del Perú)」によれば、マルカパタのマルカ (*marca*) は集落を、パタ (*pata*) は台地とか高いところを意味し、マルカパタは「高台の集落」の意味である、とされる [Espinoza 1973: 282]。実際、プエプロはまさしく三方が急坂ないしは崖状になっている尾根上に位置する集落である。先の図6-3に示したように、アウサンガテ山群から東に張りだす、この屋根の北側は標高差200~300mの急傾斜地となっており、南側もほとんどのところで崖になっている。また、この尾根の東端部も、アラス川とチュンピ川の合流点に切れ落ちているのである。

さて、プエプロは図6-6に示すように東西に走る通りを中心に格子状のプランをもっており、約100戸の住居のほか、この町の西端高台には、町を見おろすように小聖堂 (*capilla*) が位置し、東端部には広場 (*plaza*) がある。この広場のまわりに教会、保健所、中学校、村役場、農業指導員詰所、地方教育委員会等の公的機関ならびにその出張所がある。そのほか、マルカパタのなかで、このプエプロだけで見られるものに郵便局、警官派出所、数軒の商店などがある。



写真6-5 プエプロの景観

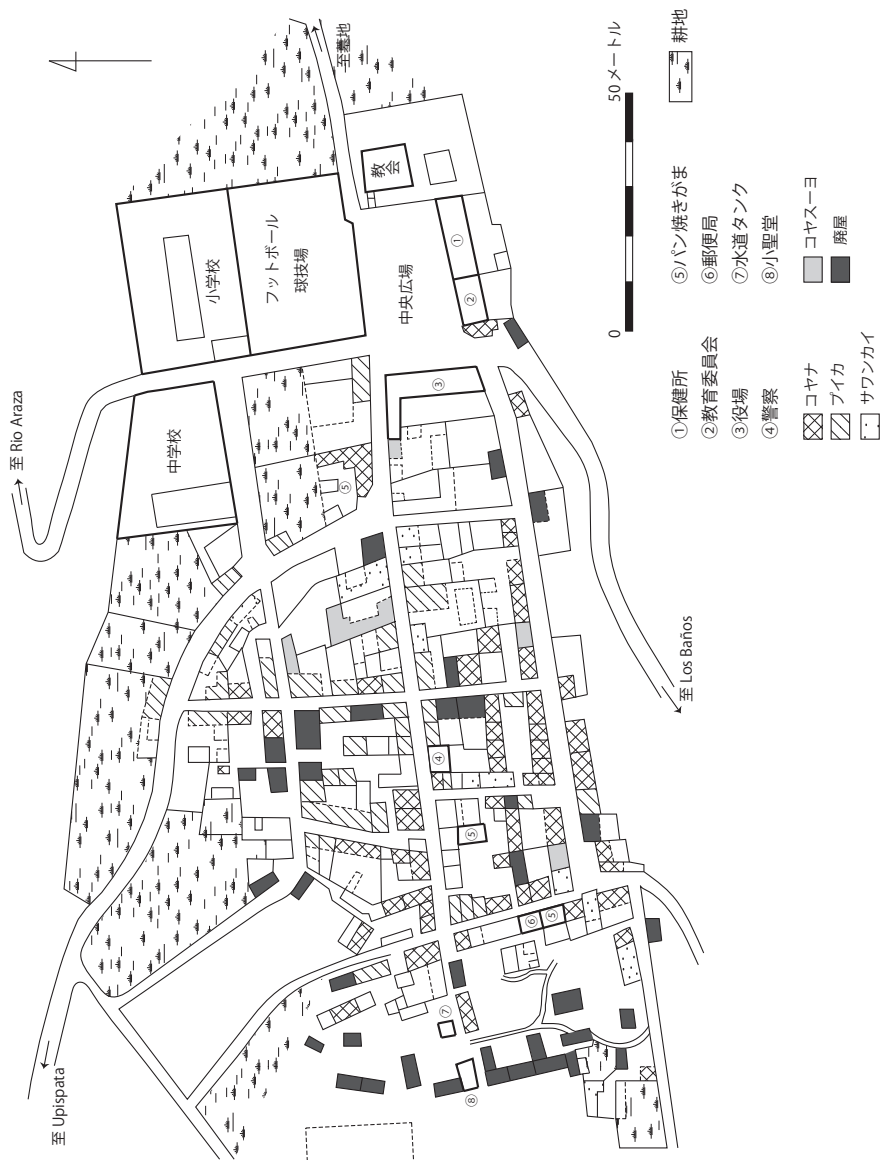


図 6-6 ブエプロ・マルカパタの概念図

これらの商店で売られているものについて見ると、パン、塩、砂糖、ココア、酒、灯油、衣類、菓子類、衣料、清涼飲料水、医薬品などである。このほか、これらの店頭には時々少量のタマネギ、ニンジン、キャベツ、ニンニクなどの野菜類も見られる。また、広場では、日曜日などにミカン、バナナ、パイナップル、アボカドなどの熱帯低地の産物が売られることがある。これらのうちで、マルカパタの農牧民にとって必要不可欠といえるものは塩とココアくらいである。また、マルカパタではこれらの商店以外のマーケットといえるものはまったく見られない⁶⁾。すなわち、少なくとも食糧に関しては自給自足しており、自給できない場合でも、交換などによりその地域内で自給自足につとめていることがうかがえる。

このプエブロの住民は、ケチュア語でミスティ (*misti*) またはヤクタ・ルナ (*llacta runa*) と呼ばれ、先住民の人はプナ・ルナ (*puna runa*) と呼ばれる。これはスペイン語でそれぞれメステイソ (*mestizo*)、インディオ (*indio*) に相当する言葉であるとされる。さらに村びとたちの表現によれば、ミスティはケチュア語のほかにスペイン語も話せる人のことであるのに対し、プナ・ルナはケチュア語だけ話し、とくにプナ・ルナの女性はモンテラ (*montera*) と呼ばれるこの地方特有の帽子や衣服を身につけている、とされる(写真6-6)。また、プナ・ルナのプナとは先述したように高原地帯のことであり、ルナは人の意なので、プナ・ルナは「高原の人」を意味する。

このように、ミスティとインディオは社会的階層が異なり、居住地も異なるが、両者は様々な場面で協力関係にあり、しばしば儀礼的親族関係をむすんでいる。インディ



写真6-6 モンテラをつけたマルカパタの先住民女性

オの子どもの初髪切りの儀礼や洗礼、さらに結婚などのときにミスティが代親になり、受礼者の両親と儀礼的親のあいだには近密な関係が成立している。

なお、一般にメスティーツは白人とインディオの混血と解されているが、マルカパタではそのような人種的な違いではなく、むしろ経済的・文化的に変容をうけた人たちを指しているように思われる。そこで本稿ではプナ・ルナをより伝統的な農牧生活をおくっている先住民のこととし、ミスティは経済的、文化的に変容をうけた人たちであるとしておこう。このミスティの特徴や集落のプランの様子から判断して、プエプロは植民地期のスペイン政府によるレドクシオンの政策によって生まれた可能性がある。

レドクシオンとは、スペインの植民地時代に、アンデスの膨大な人口を把握・統御しやすくするため広い地域に散在する人口を一定の村や町に集中させたことである。レドクシオンによる集中集落は、スペイン政府の定めた形式にしたがって建設された。すなわち、中央に広場を作り、その周囲に教会、市会等の公共建築物を配して、広場から四方に街路をのびし、それを直角に交叉させて、碁盤の目のように規則正しい集落をつくったのである。

さて、先に示したプエプロの図では数多くの放棄された家が見られる。これは、出稼ぎなどによってプエプロを離れ、そのまま戻ってこない家族の少なくないことが大きな要因のようである。実際、プエプロの住人の家族のなかには、リマヤクスコなどの都市部で生活をする者も多く、また先述した自動車道路開通後、季節労働者として道路工事に従事したり、プエルト・マルドナド (Pto. Maldonado) などに一時的に移住し、カスターニエロ (castañero) と呼ばれるカスターニャ (ブラジル・ナッツ) 採集人や砂金掘りとして出稼ぎにゆく者が少なくない。調査時点でも、17家族がプエプロを離れ、アマゾン源流域でカスターニャ採集に従事していた。

また、この図にはそれぞれの世帯が所属する共同体も示したが、大半の世帯が先述した4つの共同体のいずれかに所属している。つまり、プエプロは位置的にはコヤナに位置しているものの、その住人が成員権をもつ共同体は様々に異なるのである。そして、このプエプロ自体もかつては4つの区画にわけられ、各区画はそれぞれの共同体が所有するところであり、その共同体に成員権をもつ人間だけが居住していた、とされる。その後、これは異なる共同体に属しているコムネロ間の結婚などによってくずれ、図にも見られるように現在はその区画もあいまいなものとなっている。

しかし、プエプロを離れた先住民社会では、コムニダの地縁血縁的な特徴が明らかである。それを知るために、コムニダの内婚率を見てみよう。表6-3は、マルカパタ地区において役場に残されていた18年間 (1955~1966, 1972~1977) の婚姻データのうち、出身コムニダが明らかな166組の内婚率を示したものである。ただし、プエプロに居住するミスティの出自は不明なものが多かったため、この表ではミスティを省き、先住民のみについて記している。これによれば、コヤナのコムニダでは56組のうちの54組、つまり

表6-3 マルカパタにおける内婚率

男	女	コヤナ	サワンカイ	プイカ	コヤスーヨ	小計
	コヤナ	54	0	2	0	56
サワンカイ	1	37	2	0	40	
プイカ	2	1	42	2	47	
コヤスーヨ	0	0	0	23	23	
小計	57	38	46	25	166	

96パーセントがコムニダ内の内婚で、コムニダ外との外婚はわずか2組でしかなかった。サワンカイやプイカのコムニダもほぼ同様で、コヤスーヨにいたっては全てがコムニダ内での婚姻であった。したがって、マルカパタでは4つのコムニダの全てで、きわめて内婚率が高く、ほとんどの先住民が同じコムニダの人間と結婚しているのである。

これは、各コムニダの領域の立地条件とも大きな関係がありそうだ。先述したように、マルカパタの4つのコムニダの領域は、基本的に尾根または川で区切られている(図6-5)。しかも、その尾根は急峻で川も谷が深く、隣接するコムニダへのアクセスは容易ではない。つまり、谷をへだてる尾根や川はコムニダ間の交渉をかなり拒んでおり、谷の閉鎖性・孤立性を高めている。その結果、各コムニダの人びとの生活空間は、基本的にそれぞれのコムニダの領域である谷間にかぎられ、この谷間の上下方向のみに移動もほとんどかぎられるのである。こうして、プエプロを除く各コムニダは地縁血縁的な色彩がきわめて濃い社会を形成することになる。そして、これが後述する農耕や牧畜のあり方にも大きな影響を与えているのである。

ただし、これらの共同体は単に行政的に同じマルカパタ地区に属しているというだけではなく、あるまとまりをもった地域社会を構成している側面もある。それをよく象徴している行事がある。この行事は、イグレシア・ワシチャイ (*iglesia washichay*) と呼ばれ、プエプロにある教会の屋根を4年ごとにふきかえる儀礼的色彩の濃い作業である。この教会の屋根は、アンデスで見られる教会としては珍しくイチユでふかれているが、この屋根を4等分し、各共同体が分担した部分をふきかえる(写真6-7)。マルカパタで見られる祭や共同労働が共同体単位でおこなわれているのに対し、この行事は、ミスティもインディオをも含む地区内の全共同体の人間によっておこなわれるのである。このように、プエプロは、マルカパタ地区の行政の中心であるだけでなく、各共同体にとっても政治、祭祀の中心地となっている。そして、マルカパタの4つの共同体は、このプエプロを中心として統合され、ひとつの地域社会を構成しているのである[山本1992b]。



写真6-7 教会の屋根を4年ごとにふきかえるイグレスシア・ワシチャイの作業風景

4 農耕の技術と文化

4.1 環境区分と栽培植物

4.1.1 環境区分

これまで述べてきたように、マルカパタにおける自然環境はきわめて変化に富んでおり、とくに高度の差による自然条件の違いが著しい。このような高度により異なる自然条件の特徴は、マルカパタの農牧民によって、明確に認識、把握されている。そして、4000mにおよぶ高度差が利用されて、様々な作物が栽培され、家畜の飼養がおこなわれている。以下にそれを具体的に見てゆこう。

図6-7は、マルカパタにおいて、栽培されているのを直接観察することができた作物とその栽培高度域を示したものである。聞きとりによれば、このほかにも若干の作物が栽培されているものと見られるが、それらはいずれもごくわずか栽培されているにすぎず、重要性も低いことから、この図でマルカパタの栽培植物の概要を知ることができる。

この図に示されているように、マルカパタにおける農耕限界は標高4200~4300mあたりである。それ以上の高地では寒さのため作物はできないが、自然の草原を利用してリヤマ、アルパカ、ヒツジなどの家畜が飼われる。このような農耕限界を超えた高地は、一般にリティ・クチュ (*riti cuchu*) と呼ばれる。

リティ・クチュは、スペイン語では *rincón de la nevada* に相当するといわれることから、厳密には谷の源頭部、氷河末端のすぐ下あたりを指している。そこは、ほとんどの

作物名	現地名	学名	栽培高度 (m)			
			1000	2000	3000	4000
パイナップル	piña	<i>Ananas comosus</i>				
グアバ	guallava	<i>Psidium guajava</i>				
インゲンマメ	frijol	<i>Phaseolus vulgaris</i>				
パカイ	pácay	<i>Inga</i> sp.				
・サトイモ	uncucha	<i>Colocasia esculenta</i>				
マニオク	yuca	<i>Manihot esculenta</i>				
・バナナ	plátano	<i>Musa</i> sp.				
アチオテ	achiote	<i>Bixa orellana</i>				
タバコ	tabaco	<i>Nicotiana tabacum</i>				
グラナディーヤ	granadilla	<i>Passiflora</i> sp.				
アボガド	palta	<i>Persea americana</i>				
・サトウキビ	caña	<i>Saccharum officinarum</i>				
トマト	tomate	<i>Lycopersicon esculentum</i>				
・柑橘類	limón, naranja	<i>Citrus</i> spp.				
アチラ	achira	<i>Canna edulis</i>				
ペピーノ	pepino	<i>Solanum muricatum</i>				
サツマイモ	apichu	<i>Ipomoea batatas</i>				
パパイヤ	papaya	<i>Carica papaya</i>				
・モモ	durazno	<i>Prunus persica</i>				
カボチャ	zapallo	<i>Cucurbita</i> spp.				
トウモロコシ	sara	<i>Zea mays</i>				
・コーヒー	café	<i>Coffea</i> sp.				
ラカチャ	viraca	<i>Arracacia xanthorryza</i>				
トウガラシ	locoto	<i>Capsicum pubescens</i>				
・タマネギ	cebolla	<i>Allium cepa</i>				
・キャベツ	col	<i>Brassica deracea</i>				
ヤコン	llacón	<i>Polymnia edulis</i>				
カブリ	capli	<i>Prunus capollin</i>				
・ソラマメ	haba	<i>Vicia faba</i>				
タルウイ	taruhui	<i>Lupinus mutabilis</i>				
キヌア	quinua	<i>Chenopodium quinua</i>				
マシュア	isaño	<i>Tropaeolum tuberosum</i>				
オユコ	oiluco	<i>Ullucus tuberosus</i>				
オカ	oca	<i>Oxalis tuberosa</i>				
ジャガイモ	papa	<i>Solanum</i> spp.				

図6-7 マルカパタの栽培植物とその栽培高度域 (1979年1月～2月)

・印の作物は旧大陸起源の栽培植物 [山本 1980]

草本類が枯死してしまう乾季にあっても、氷河から流れおちる水によって、つねに草地在維持されているため、牧畜にとってきわめて重要なところとなっている。したがって、このような地域と完全な氷雪帯を区別する必要があるときは、それぞれリティ・クチュ、ママ・リティ (*mama riti*) と呼ばれる。村びとによれば、ママ・リティは“大量の雪”に相当する言葉であり、氷雪地帯のことであろう。

作物の栽培高度域は、マルカパタの領域の最下部に位置する標高約1000mの低地から標高4200～4300mの農耕限界までの3000mあまりに達する。そして、そこに40種近くの様々な作物が見られる。これらのなかでいちじるしく栽培面積が大きく、主作物と見られるのはジャガイモ (*Solanum* spp.) とトウモロコシ (*Zea mays*) である。ジャガイモの栽培ゾーンは、標高3000mから標高4200mあまりまでで、トウモロコシは標高約1000mから標高3100mまでである。

すなわち、マルカパタではトウモロコシの栽培の上限は標高3100mあたりで、そこから上は主としてジャガイモが栽培されているのである。この3100mという標高は、先に述べたようにマルカパタの中心地であるプエブロが位置するところである。したがって、ジャガイモはプエブロを中心として、それよりも上の高度域で栽培され、トウモロコシ



写真6-8 プナの景観



写真6-9 ユンカの景観。手前にバナナが見える

は下で栽培されるということもできる。このようなプエブロの上下数百mの高度域はヤクタ (*llacta*) と呼ばれる。ヤクタは先述したようにケチュア語で町や村を意味し、マルカバタではプエブロを指しているが、環境区分のゾーンのひとつとしても用いられるのである。環境区分帯としてのヤクタは、プエブロ周辺部といった、かなり漠然とした概念であるが、植生のうえではほぼ雲霧林帯に対応している。したがって、ヤクタのゾーンは標高2600mあたりから標高3400mあたりまでと考えられ、アンデスで広く使われて

いるケチュア帯に相当するようである。

このヤクタとリティ・クチュ帯のあいだの高度域はプナ (*puna*) と呼ばれる (写真6-8)。一般に、プナは植生のうえて、ほぼ草地帯に相当するところであり、そこだけを指すときはハトゥン (大)・プナと呼ばれる。その上限は村びとによれば「ジャガイモができるところまで」というが、プナは単に高度や植生のみによって認識されているのではなく、もっと高くても、なだらかに広がる高原はプナと呼ばれることがある。とにかく、プナは寒冷高地となっているため、ジャガイモをはじめとする寒さに強い作物が栽培されるほか、リヤマ、アルパカ、ヒツジなどが放牧されるところとなっている。

一方、ヤクタより低いところは一括してユンカ (*yunca*) と呼ばれる。具体的には、標高2600mの位置にユンカワロ (Yuncahuaro) という集落があるが、これより低地部のことである。したがって、ユンカは亜熱帯降雨林地帯にあたるところで、高温で、降水量も多く、様々な熱帯性の果実類ができるところである (写真6-9)。

以上、見てきたように、高度差が4000mに達するマルカパタの領域は、マルカパタの農牧民によって基本的に4つの環境区分帯にわけられ、それぞれリティ・クチュ、プナ、ヤクタ、ユンカと呼ばれる。なお、自然条件の差は高度の違いだけで生みだされるものではなく、山腹斜面の方位などによっても大きく異なってくる。とくに、マルカパタでは、ほとんど平坦地がなく、山腹斜面に耕地をもつので、斜面方位が農業におよぼす影響も大きい。これは、先にプエプロ周辺部の例に示したとおりである。

ところで、これらの環境区分帯のうちのプナに暮らす人びとがプナ・ルナ、すなわちケチュア族の先住民である。ただし、彼らはプエプロのような集村ではなく、高原地帯の中で小流ぞいに点在して暮らしている。一方、低地部のユンカ地帯は、先述したように近年になって移住してきた人たちが主として換金作物などを栽培して生計を維持しているが、これらの作物の大半はクスコなどの都市部に運ばれるため、マルカパタ本来の経済とはほとんど関係をもたない。

4.1.2 多種多様な栽培植物

先の図6-7を、あらためて眺めて見ると、きわめて多様な作物が栽培されていることに気づく。村には大きな高度差があるため、高度によって気温や雨量が大きく異なるので、低地から高地までのあいだで多様な作物が栽培されているのである。調査の都合で低地部は自動車道路にそったところしか観察できていないので、見落とした作物もあるかもしれないが、これでおおよその傾向は知ることができる。

この図で、まず気づくことがある。それは作物の大半が新大陸産のものであり、旧大陸産の作物が少ないことである。旧大陸産の作物が比較的多く見られるのは、マルカパタのなかで最も低いユンカ地帯である。そして、これらのユンカ地帯で栽培されている旧大陸産の柑橘類やバナナ、サトウキビ、コーヒーなどはいずれも換金作物として栽培

されている。先述したように、これらの換金作物を栽培するのは大半がマルカパタのものとの住民ではなく、近年になって入植した人たちなのである。

一方、高地部での作物はほとんどがアンデス伝統のものである。とくに、標高4000m前後の高地ではジャガイモ、オカ、オユコ、マシユア（イサーニヨ）などのアンデス原産のイモ類だけが栽培されている。このなかで栽培面積の圧倒的に大きいものがジャガイモである。ジャガイモ用の耕地は標高3000mあたりから標高4000mを超す高地まで連続して見られる。そして、標高3000m以下ではトウモロコシ畑が広がってくる。つまり、マルカパタでは多様な作物が栽培されているが、主作物といえるのは高地部でのジャガイモと低地部でのトウモロコシなのである。

このことを示すものが栽培面積のほかにもある。それが、ジャガイモもトウモロコシも、どちらも個人所有の耕地ではなく、アイユ共同体の共同耕地で栽培されることである（写真6-10, 6-11）。このような共同耕地はマンダ・チャクラ (*manda chacra*) と呼ばれて、個人所有の耕地であるキタ・チャクラ (*kita chacra*) とはつきり区別される。そして、キタ・チャクラの耕地はマルカパタ全体から見ればきわめて小さく、あとはすべて共同耕地である。とくに、先住民でキタ・チャクラをもつ者は少なく、彼らのほとんどがアイユ共同体の共同耕地で作物を栽培する。

この共同耕地のうち、トウモロコシ用のものはサラ・マンダ（サラはトウモロコシのこと）、ジャガイモ用のものはパパ・マンダ（パパはジャガイモのこと）と呼ばれる。ただし、トウモロコシ用の共同耕地もジャガイモ用の共同耕地も、それぞれトウモロコシやジャガイモだけが栽培されるわけではなく、前者ではソラマメやカボチャなども混植されるし、後者ではオカやオユコ、タルウイなども輪作される。しかし、サラ・マンダ、パパ・マンダの呼称が示すように、基本的に前者はトウモロコシ用、後者はジャガイモ用の共同耕地なのである。

ちなみに、トウモロコシはマルカパタ村のなかで最も低い標高約1000mから標高3000mあたりまで栽培可能であるが、このうち共同耕地が見られるのは標高2400mから標高3000mあたりまでである。そして、そこでは先述したように陽当たりのよい北向きの斜面のほとんど全面がトウモロコシ耕地になっている。これよりも低地部では森林の方が目立ち、森林のなかにまばらにあるトウモロコシ耕地はプエプロに住むミスティヤ入植者たちの個人的な所有になっている。このことは、アンデス高地に住む先住民にとって低地部はあまり大きな意味をもたないことを物語っている。

ここで、もうひとつ付け加えておかなければならないものがある。それは寒さのために農耕が不可能な高地部での家畜飼育の重要性である。マルカパタにおける農耕限界は標高4300mあたりであるが、畑そのものは標高4000mあたりからまばらになる。そして、このような高地部ではリヤマやアルパカなどのアンデス特産のラクダ科家畜、そしてヨーロッパから導入されたヒツジなどが放牧されている。これらの家畜は、肉がたんぱく



写真6-10 トウモロコシの共同耕地



写真6-11 ジャガイモの共同耕地。後方は休閑地

源になるだけでなく、その糞は燃料としても肥料としても先住民にとって欠かせないものとなっている。

このように、マルカパタの村びとにとって生業の基本になっているのはトウモロコシとジャガイモの栽培、そしてリヤマやアルバカなどの家畜の飼育である。ただし、ここ

表6-4 プエブロ・マルカパタの世帯 (1979年3月) [山本 1980]

世帯 番号	所属コ ムニダ ¹⁾	世帯の人数 ²⁾			ジャガ イモ ³⁾	トウモ ロコシ ⁴⁾	ウマ	ウシ	リヤマ	アル パカ	ヒツジ	備考
		男	女	計								
1	S	4	3	7	10	8	—	—	—	—	—	役場勤務
2	S	3	3	6	2	1	2	—	—	—	—	カスタニエロ
3	C	4	4	8	10	5	10	5	—	—	—	牧師
4	M	2	1	3	4	6	—	—	—	—	—	
5	M	2	3	5	5	1	—	—	—	—	—	
6	S	1	1	2	10	5	3	13	—	5	—	
7	S	1	2	3	10	5	6	30	—	15	20	商店経営
8	S	2	4	6	6	2	1	8	—	—	—	運転手
9	M	2	3	5	8	3	—	—	—	—	2	カスタニエロ
10	P	1	1	2	10	1	—	—	—	—	—	
11	P	2	3	5	10	3	—	3	—	—	—	
12	P	0	1	1	15	6	2	—	—	—	—	
13	S	4	2	6	20	5	1	10	—	—	—	
14	P	2	2	4	5	3	—	3	—	—	—	
15	P	5	1	6	10	4	2	14	—	—	—	
16	P	1	2	3	10	6	4	13	—	10	—	
17	P	4	1	5	20	10	5	10	—	—	—	
18	M	2	5	7	10	3	6	10	—	—	4	商店経営
19	M	3	2	5	1	2	—	1	—	—	6	カスタニエロ
20	M	1	3	4	4	2	—	7	—	—	—	商店経営
21	M	2	1	3	2	1	—	—	—	—	—	
22	M	1	3	4	4	2	1	—	—	—	—	
23		1	0	1	4	2	—	—	—	—	—	
24	M	1	3	4	4	1	—	—	—	—	—	
25	M	2	3	5	1	1	—	—	—	—	—	大工
26	M	4	3	7	3	3	1	—	—	—	—	運転手
27	M	1	3	4	5	2	4	30	—	—	4	運転手
28	M	2	2	4	7	5	4	14	—	—	—	
29	P	1	0	1	2	1	4	15	—	—	—	運転手
30		4	4	8	2	1	—	—	—	—	—	
31		1	5	6	—	—	—	3	—	—	—	保健所勤務
32	M	3	3	6	4	2	1	—	—	—	—	
33	P	4	1	5	5	1	1	4	—	—	—	商店経営
34	P	2	1	3	16	4	—	—	—	—	—	
35	S	1	0	1	6	4	—	—	—	—	—	
36	P	2	2	4	10	5	10	20	—	—	—	
37	M	1	2	3	10	4	—	4	—	20	12	
38	P	1	0	1	10	5	2	—	—	3	—	
39	M	4	3	7	6	2	8	60	2	—	—	
40	P	4	2	6	2	5	—	—	—	—	—	
41	P	2	5	7	7	8	6	15	—	—	3	
42	P	6	3	9	20	4	3	—	—	—	—	
43	M	1	1	2	9	5	8	13	—	—	3	
44	M	2	1	3	4	3	—	—	—	—	—	
45	M	1	1	2	4	4	1	1	—	—	—	
46	M	4	1	5	3	4	—	—	—	—	—	
47	M	2	0	2	6	2	—	—	—	—	2	カスタニエロ
48	S	3	2	5	10	4	6	1	—	—	—	
49	S	3	2	5	1	—	1	—	—	—	—	
50	M	1	1	2	2	1	—	2	—	—	—	
51	M	3	3	6	6	3	15	10	—	—	—	
52	M	4	2	6	—	—	—	1	—	—	—	
53	S	1	0	1	6	4	—	5	—	—	—	
54	M	0	3	3	2	1	—	—	—	—	—	
計					363	175	118	325	2	53	56	

1) S: サワンカイ、C: コヤサーヨ、M: コヤナ、P: ブイカ、無記名は無所属を示す。 2) 世帯主をふくむ。
3) 単位はsaco (馬用の輸送袋に種イモをつめた1袋分) 4) 単位はアローバ

でいう村びとはプエブロに住むミスティや低地部に入植した人たちのことではなく、村びとの大半を占める先住民のことである。ミスティのなかにも、ジャガイモやトウモロコシを栽培し、家畜を飼っている人もいるが、その家畜はウシやウマ、ブタなど、アンデス本来のものではない。表6-4は、プエブロの住民のうち、調査のできた64世帯中で耕地および家畜を所有する54世帯のそれぞれの内訳を示したものである。これによっても明らかのように、ほとんどの世帯がトウモロコシや、ジャガイモの耕地をもち、家畜も所有しているのである。すなわち、外部社会の影響を強くうけ、貨幣経済にまきこまれていくと考えられるミスティでさえも、その食糧に関しては自給自足的傾向が強いと考えられるのである。ただし、飼育している家畜の種類に関しては後述する先住民のそれらとは大きく異なる。ミスティが飼育する家畜の大半はヨーロッパ由来のウシやウマであり、アンデス伝統のリヤマやアルパカを飼う者はほとんどいない。また、低地部に住む入植者は主として換金作物を栽培しており、その換金作物の大半がアンデス本来のものではない。つまり、マルカパタの村民のなかでアンデスの伝統を最も色濃く残した生活を送っているのは先住民たちなのである。そこで、以下では先住民の暮らしに焦点をあてて述べてゆくことにしよう。

4.2 耕地の型と分布

マルカパタでは、ユンカと呼ばれる低地部以外では、ジャガイモもトウモロコシもアイユ共同体の耕地で栽培されると述べたが、これには例外がある。それがプエブロ周辺にある耕地だ。先述したように共同耕地がマンダ・チャクラと呼ばれるのに対し、こちらにはキタ・チャクラと呼ばれる。キタ・チャクラは世帯ごとに個別に利用する耕地で、マンダ・チャクラは共同体の共同耕地である。以下に、それぞれの機能と分布について述べることにしよう。

4.2.1 キタ・チャクラ

キタ・チャクラは、一般に集落に隣接する比較的小さい私的な耕地である。たとえば、先に示したプエブロの図6-5で村の周辺に見られた耕地はすべてキタ・チャクラである。また、写真6-12はプエブロとロス・バーニョスのあいだの斜面に見られるキタ・チャクラを示したものであるが、この耕地は写真に見られる自動車道路の開通まで共同耕地であったといわれる。

つまり、共同耕地は共同体の領域の一部を石垣などの垣根、ピルカ (pirka) によって区切られた耕地で、そのなかに原則的に共同体の世帯すべての耕地が見られる。ところが、写真6-12の共同耕地は、自動車道路が横切ってつけられたため、家畜の侵入を防ぐための垣根がその機能をはたさなくなり、耕作者ごとに、その耕地の周囲に垣根をもうけ、個別に利用するようになった。それがキタ・チャクラなのである。



写真 6-12 キタ・チャクラ

共同体の共同耕地は原則的に売買が禁止されているが、キタ・チャクラの耕地はかなり自由に売買されている。そのため、プエブロに近く、また東向きの比較的ゆるい斜面に位置する写真のキタ・チャクラは、ほとんどが経済力のあるミスティの所有するものとなっている。また、一部にオコンガテやハトハなどのマルカパタ以外に居住するミスティが所有する耕地もある。このような不在地主の耕地はマルカパタの人間が借りうけて耕作し、収穫を折半するという方法がとられている。

キタ・チャクラの耕地で栽培されるものについて見るとトウモロコシ、ジャガイモのほか、キャベツ、タマネギ、ラカチャ、ソラマメ、ガボチャなど雑多であるが、最も栽培面積の大きいものはトウモロコシとジャガイモである。そして、これらは、それぞれ早生のトウモロコシ、早生のジャガイモを意味するミシュカ・サラ (*mishka sara*)、ミシュカ・パパ (*mishka papa*) と呼ばれ、このことからキタ・チャクラはしばしばミシュカ・チャクラとも呼ばれる。

しかし、キタ・チャクラで栽培されるトウモロコシとジャガイモは特別な早生の品種ではなく、栽培時期をかえることによって共同耕地で栽培されるものより収穫時期を早めている。すなわち、共同耕地のトウモロコシ (*jatun sara*: ハトゥン・サラと呼ばれる) やジャガイモが9月頃から11月にかけて播種されるのに対し、ミシュカは6月から7月に播種されるのである。その結果、ミシュカは共同耕地のものより2~3カ月早く収穫できる。ミシュカ・パパが収穫される1~2月は、共同耕地の収穫前にあたり最もジャガイモが不足する時期になっているのでミシュカのジャガイモはもっぱら換金用とされるのである。

4.2.2 マンダ・チャクラ

キタ・チャクラの耕地はマルカバタ全体の耕地面積から見ればごくわずかで、あとはすべて共同耕地である。したがって、共同耕地で栽培される作物が日常生活での食糧のほとんどを供給している。また、キタ・チャクラは、世帯ごとに、個別に利用する、いわば私的な耕地であるのに対し、共同耕地は共同体の共同耕地とでもいうべき性格のものである。つまり、キタ・チャクラの耕地はその管理や運営がまったく個人にまかせられているのに対し、共同耕地はその耕地の周囲の垣根の修復が共同体の共同作業によっておこなわれるほか、播種や収穫の期日が共同体の集会で決定されるなど、耕地の管理や運営に共同体の規制が見られるのである。

さて、写真6-13は、先の図6-3にも示した、プエブロから谷ひとつへだてた南側の山腹斜面に展開する階段耕地の一部であるが、この斜面の耕地のほとんどはサワンカイ共同体の共同耕地である。そして、この写真の中央の細い山道から上部は、すべてジャガイモ耕地であり、下部はトウモロコシ耕地となっている。これらの耕地は、中央の山道にそった部分などの耕地周辺部のみが家畜の侵入などを防ぐために石垣やトゲのある枯木などで囲われている。



写真6-13 山腹斜面に展開する共同耕地。上の部分はジャガイモの共同耕地、下の部分はトウモロコシの共同耕地

また、ジャガイモの共同耕地は、コヤナ共同体ではムユ (*muuyu*) ないしはセクトール (*sector*) と呼ばれるほぼ等しい面積をもつ5つの区画にわけられている。後述するように、一般にジャガイモ耕地は1年耕作したあと数年間休閑されるが、ここでは1年耕作、4年休閑のローテーションがとられているのである。これらの境界も、崖や急峻な尾根などの地形的特徴を利用できるところ以外は、やはり石垣やブッシュを積み、家畜の侵入を防ぐように工夫されている。ときに道が、この耕地を横切っていることがあるが、その場合は、そこに一時的なひらき戸をつくる。

ところで、先にトウモロコシとジャガイモの栽培高度域が、標高3100mあたりではつきりわかることを指摘したが、これは共同耕地の分布高度域を示している。つまり、集落周辺のキタ・チャクラでわずかに栽培されるものをのぞけば、マルカパタではトウモロコシとジャガイモはすべてそれぞれ専用の共同耕地で栽培されるのである。以下では、これらのトウモロコシとジャガイモの共同耕地の概要について述べることにする。

① トウモロコシの共同耕地

トウモロコシの栽培について、まず述べておかなければならないことがある。それは、マルカパタで栽培されるトウモロコシは高度によって3つのグループに大別され、それぞれヤクタ・サラ (*llacta sara*)、ワリ・サラ (*wari sara*)、そしてユンカ・サラ (*yunca sara*) と呼ばれることである。このうち、ユンカ・サラは名称どおり、低地部のユンカで栽培されるトウモロコシであり、先住民でこのユンカ・サラを栽培する者はほとんどいない。彼らにとって重要なトウモロコシはヤクタ・サラとワリ・サラである。このうち、ヤクタ・サラはヤクタ (プエブロ) の近くで栽培されるトウモロコシであり、ワリはそれよりも下、標高でいえば2600m前後で栽培されるトウモロコシである。どちらも共同耕地で栽培されるため、トウモロコシの共同耕地は標高3100mから標高2400mあたりまでに集中している。そこは各共同体の領域の最下部に位置するところで、南向きの斜面は先述したように寒さのため耕地として利用できないが、それ以外の斜面はすべてトウモロコシの共同耕地となっており、ここがサラ・マンダと呼ばれるのである。

共同体ごとに見てゆくと、サワンカイの共同耕地は、写真6-13に示したプエブロと谷ひとつへだてた北面の斜面下部に集中している。この斜面は、チュンピ川とコヤスーヨ川が合流するユンカワロ (標高2600m) あたりまでつづき、サワンカイのトウモロコシの共同耕地もその近くまで連続する。ただし、このうちコスコーノ (*Qoscouno*) と呼ばれる小流から西側はコヤナの共同耕地である。

このように異なる共同体に属している共同耕地が境界を接しているのはマルカパタでは例外的で、一般的には谷によって境界がへだてられている。プイカの共同耕地はすべてユンカワロとコチャの中間に位置するマルカパタ川左岸、現地でカチワ (*Kachiwa*) と呼ばれるところに集中している。そこは、ほぼ東西に走る尾根が北東方向に屈曲して

いるところで、この尾根からマルカパタ川につづく、やや東向きの斜面である。また、コヤスーヨの共同体のトゥモロコシ用共同耕地は、このカチワのほぼ対岸の斜面にあたるところにある。

② ジャガイモの共同耕地

ジャガイモの共同耕地はいささか複雑である。トゥモロコシの共同耕地がほぼ1カ所に集中しているのに対し、ジャガイモの共同耕地は標高約3000mから標高4200mあたりでの高度域を4つにわけているため、4つものジャガイモの共同耕地があるからだ。これら4つの耕地で栽培されるジャガイモは、それぞれ、低い方からマワイ、チャウピマワイ、プナ、そしてルキと呼ばれる。そして、それぞれの共同耕地は休閑のためいくつもの区画に分けられている。また、この休閑年数は共同体によって異なっている。

そこで、ここでは私が最も長期にわたって調査をしたコヤナ共同体に例をとり、具体例を示して報告しておこう。マルカパタではジャガイモは栽培する高度と時期を違えることによって1年に5回も収穫される。このうち、パパ・シシユカだけは私的な耕地で栽培されるが、残りのジャガイモは植え付けや収穫の時期、栽培方法などが異なる共同耕地で栽培される。これらの共同耕地で栽培されるジャガイモが、マワイ、チャウピ・マワイ、プナ、ルキと呼ばれるものなのである。ただし、これらの名称はジャガイモの品種を示しているのではなく、栽培されるジャガイモ品種の総称である。

さて、コヤナ共同体のジャガイモ耕地は、チュンピ谷上流域の標高3000mあまりから4200mあたりまでの山腹斜面に展開している。チュンピ谷は、南西につきあげている本谷とロス・バーニョスから1kmほど上流のところから南につきあげる支谷（ラッコ川流域）からなっているため、コヤナのジャガイモ耕地はこの両方の谷に分布している。

これら2つの谷にある耕地は、基本的に同じ谷に位置する集落の共同耕地となっている。また、本谷に見られる耕地は、この谷に位置するトゥンコス（Tuncos）、チュンピ、チュンピパタ、ワイヤパタ（Hauayllapata）などの集落の共同耕地となっている（図6-8）。

これらのなかで、マワイは標高3200mから標高3600mあたりまでで栽培されるジャガイモである。また、プナは、このパパ・マワイの栽培ゾーンの上部から標高4100mあたりまでで、ルキは農耕限界に近い標高4200m前後の高地で栽培されるジャガイモである。さらに、マワイとプナのジャガイモ栽培ゾーンの間にも、チャウピ・マワイ（*chawapi maway*）と呼ばれるジャガイモの栽培ゾーンがあるが、その耕地面積は上記の2つの耕地よりかなり小さい。

ここでは、この本谷について見てゆくことにする。耕地の分布や土地利用について述べる前に、まずジャガイモ栽培のローテーションについて述べておこう。コヤナの共同耕地ではジャガイモを1年耕作したあとは4年休閑するのが基本となっている。この理

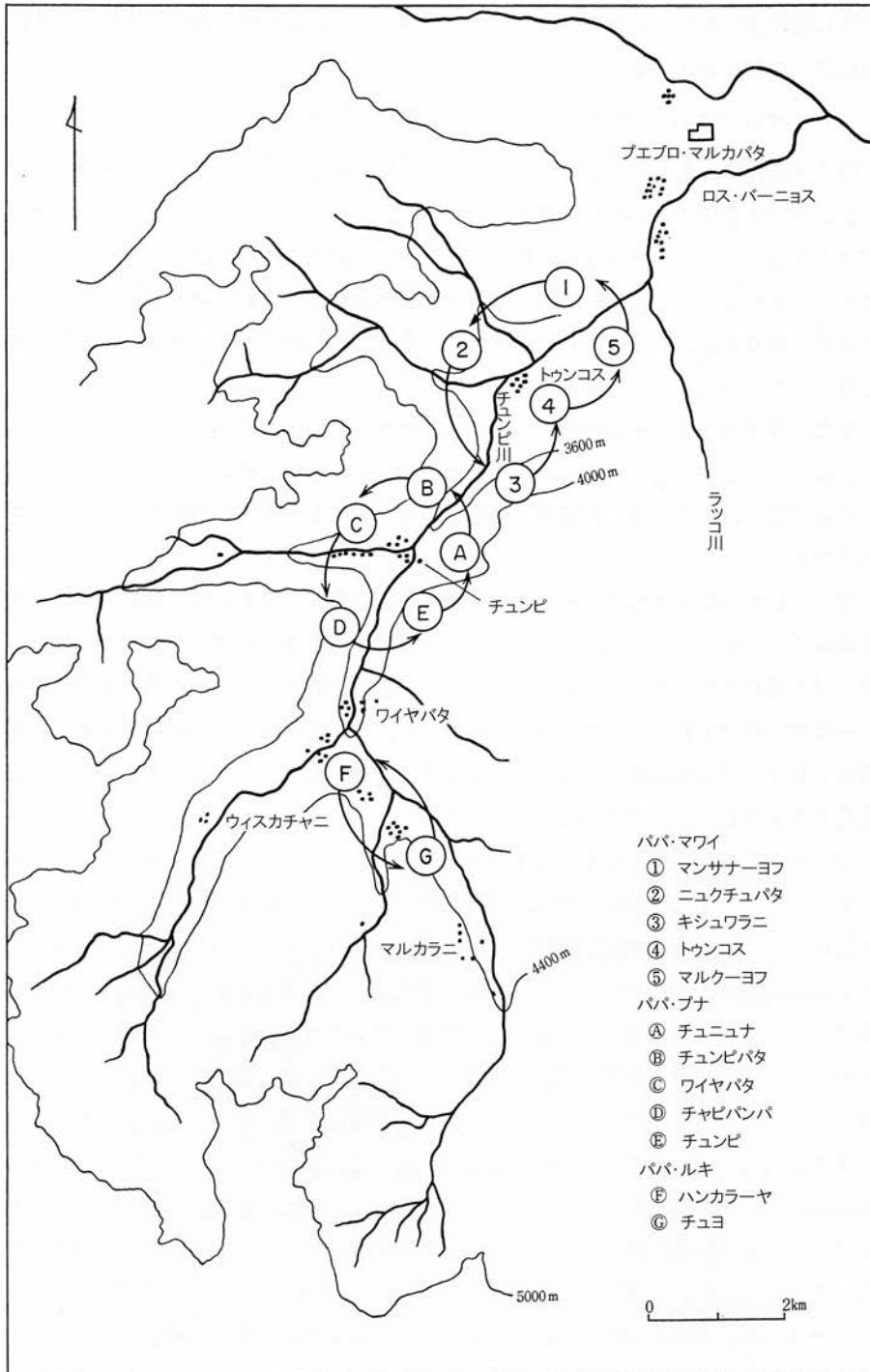


図6-8 チュンピ川流域のジャガイモ耕地とローテーション

由は地力回復のためとされるが、この点についてはのちほど検討する。その結果、毎年ジャガイモを耕作するためには、少なくとも5つの耕区が必要となる

したがって、ひとつの共同耕地をいくつかに区切り、毎年このうちのひとつの区画、ムユをつかってジャガイモ栽培をおこなう。実際、1年耕作、4年休閑というジャガイモ栽培システムをとっているコヤナ共同体では、ひとつの共同耕地のなかに5つのムユが見られる。1年耕作、6年休閑というシステムをとっているコヤスーヨでは7つのムユをもっているのである。したがって、休閑期間の短いコヤナでは、ときに耕作年にあたっているムユの一部を耕作しないで、次の耕作年まで、つまり耕作後の10年までの9年間も休閑させて、地力回復をはかることがある。このような耕地はとくにワルキ (wallki) と称され、大きな収穫が期待されるという。

さて、マワイのジャガイモ耕地から見てゆくと、調査時(1978年)に耕作されていた耕地は、マンサナーヨフと呼ばれるチュンピ川左岸流域にあるムユであった。この対岸のマルクーヨフのムユの一部でオカ、オユコ、タルウイが耕作されていたほかは全て休閑していた。つまり、このマルクーヨフは2年前に、ジャガイモを耕作したところなのである。この谷では、マワイのジャガイモは、今年、チュンピ川左岸出合い付近のマンサナーヨフのムユで耕作したあと、翌年はその上部のニユクチュパタのムユ、その次の年は右岸にうつり、トゥンコス上部のキシワラニ、つづいてトゥンコス、そして最後にトゥンコスより下部に位置するマルクーヨフのムユと毎年ジャガイモの耕地が移りかわるのである。

さらに、コヤナではこれら5つの共同耕地にくわえて、マワイの耕地として、ルナルナ、ヤナルナというところに2つの共同耕地がある、とされる。これは、先に述べた耕地だけで不足するときの予備の耕地とでもいうべきものである。

このマワイとプナのジャガイモ耕地の間に、チャウピマウイと呼ばれる共同耕地があるが、これは小さく、また十分に調査ができなかったため、この図では省略してある。

つぎにプナのジャガイモ耕地は、チュンピ谷では、標高約3800mのチュニユナから標高4000mのワイヤパタまでの両岸に展開する。マワイと同じように、やはり5つのムユがある。右岸のチュンピ、チュンピパタ、チャビパンバの3つと左岸のチュニユナ、ワイヤパタである。そして、毎年このうちのひとつのムユが使われて、プナのジャガイモ耕作がおこなわれるのである(図6-8)。

ルキの共同耕地はチュンピ谷ではV字谷が終わったU字谷の草地帯に位置している。このあたりの高度はもう農耕限界に近く、耕地の上限としては標高4250m地点である。したがって、ルキの共同耕地は標高約4100mから標高4200mあまりのわずか100mほどの高度域にある。また、ルキの共同耕地は、マワイ、プナのそれらとは違って、明確なローテーション・システムはとられていない。

すなわち、マワイ、プナで見られたような5つのムユはなく、チュンピ川の源頭のチ

ユヨとハンカラヤと呼ばれるところに位置する2つの共同耕地が使われる。1年耕作、4年休閑という基本パターンはかわりがないが、この2つの共同耕地の耕地を適当に使って耕作しているのである。ルキ帯で栽培されるジャガイモは先に見たように、とくに耐寒性の強いものであるが、それでも時にはげしい降雪や低温が長くつづくとう全滅することがあり、その栽培はかなりリスクがともなう。したがって、ルキのジャガイモは、年によって耕作しない世帯もあり、マワイやプナのジャガイモに比べると毎年耕作される耕地面積がかなり小さいのである。

5 農耕技術

5.1 農作業暦

5.1.1 雨季に集中する農作業

以上、やや詳しく共同耕地の型と分布について述べた。これは、彼らの生業の中心が農業であり、その農作業が基本的に各共同体の共同耕地でおこなわれるからである。では、これらの共同耕地を使つての農作業は具体的にはどのようにおこなわれるのであろうか。そこで、次に彼らの1年の動きについて述べておこう。

冒頭で述べたようにペルー・アンデスは明確な雨季と乾季が存在する熱帯山地に位置しており、1年をとおして気温の変化はあまりないが、雨量が大きく変化する。このような気候の特徴はマルカパタでも見られ、そのため村びとも1年をチラウ（乾季）とポコイ（雨季）の2つの時期にわけるとして、マルカパタでは基本的に灌漑はおこなわず、自然の降水のみによって農耕をおこなうので、作物の栽培は雨季に集中する（図6-9）。

ただし、マルカパタには大きな高度差があるため、雨季の始まりも雨量も高度によって少しずつ異なる。低いところほど雨季は早く始まり、また雨量も多い。このため、最初に植え付けるのが、ジャガイモ畑のなかでは最も低地部の標高3000mあまりに位置するマワイのジャガイモ耕地である（ミシユカは8月に植え付けられるが、規模が小さく私的な耕地なので、この図では省略した）。ケチュア語でマワイは早生というような意味をもつが、そのなかにはいくつもの品種が含まれる。このマワイの耕地では休閑地に生えた灌木や雑草を8月はじめに燃やし、この灰を肥料にしてジャガイモを植え付ける。

先述したように、ジャガイモの耕地は少なくとも4年間は休閑するため、新しく植え付けるムユは雑草でおおわれており、とくにマワイの耕地は標高が低いため、灌木を含む雑草の繁茂が激しく、これを乾季のあいだに伐採、除草したあと燃やすのである。このため、この時期のチュンピ谷は煙で空が暗くなるほどである。

なお、マワイの共同耕地にかぎらず、ジャガイモの共同耕地では植え付け前に大きな作業がある。それは、共同耕地のまわりに巡らされている垣根、ピルカの修復である。

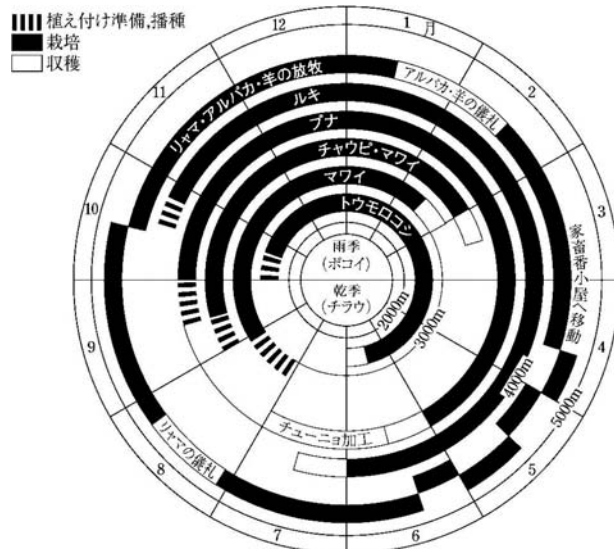


図6-9 マルカパタ村における農民の1年の動き

トウモロコシ耕地の場合、毎年使われるため、その修復は一部にとどまるが、ジャガイモ耕地は数年間も放置されていたため崩壊している垣根が多い。そのため、この垣根の修復作業、ピルカスカは共同体の集会で日程や役割を決めて、共同作業としておこなわれるのである。

ただし、植え付け作業は各家族単位でおこなわれる。共同耕地ではあるが、各世帯が耕作する土地は決まっているのだ。露岩や段差などを目印として境界が決められており、この境界の中で農作業は家族ごとにおこなわれる。種イモはブナにある家で貯蔵してあったものが使われるので、リヤマやウマなどを使って耕地まで運びおろされる。

ジャガイモの植え付けは、伝統的な農具の踏み鋤が使われる。この踏み鋤で耕地の斜面下部から上部に向かって50cmくらいの間隔で穴をあけてゆき、そこにジャガイモを植え付ける。具体的には、男性が踏み鋤で穴をあけてゆき、それを追うようなかたちで女性がイモを2～3個ずつ穴にいれ、土をかぶせる。その上に雑草などを燃やしてつくった灰を肥料として広げておく。このため、ブナ帯の高地に家をもつ先住民は山をくだった出作り小屋に数日間移り住むのである。

9月はじめ、マワイの植え付けを終えると、こんどは標高3500mあたりにあるチャウピ・マワイのジャガイモの植え付けをおこなう。チャウピ・マワイの耕地は家から比較的近いこともあり、毎日家から通って作業をおこなう。数日で植え付けを終えると、肥料として家畜の糞と灰を半々の比率で与える。この高度では休閑地に生える植物はわずかであり、それを灰にしても肥料としては十分ではないため家畜の糞で補うのである。

次は9月中旬、標高3800mあたりでのブナのジャガイモの植え付けである。これがジ

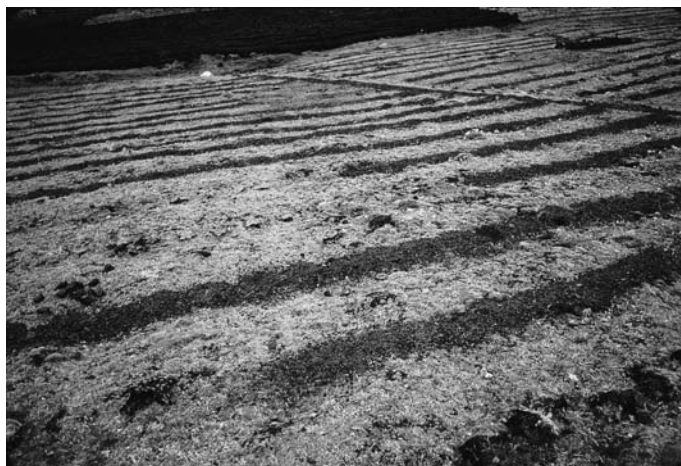


写真6-14 家畜の糞による施肥



写真6-15 サラ・チュクヤ（トウモロコシの出作り小屋）

ジャガイモの共同耕地としては最大のもので、そこには数多くの品種が植え付けられる。これらのジャガイモ栽培のためにリヤマやアルパカ、ヒツジなどの糞が肥料として大量に与えられる。ふつう、種イモ1袋に対して肥料としての糞が10袋の比率で与えられるが、ときにこの比率は1対20になることもある。家畜の糞は燃料としても貴重であり、それを肥料として大量に投与することは、とりまなおさずプナのジャガイモの重要性を物語るものである（写真6-14）。

プナの共同耕地におけるジャガイモの植え付けが終わると、こんどはトウモロコシの播種の準備を始める。トウモロコシの果穂から種をはがし、種とりの作業をする。このあと、9月の末頃に家族で山をくだり、トウモロコシの出作り小屋のサラ・チュクヤ

(*sara chuklla*) に1週間ほど移り住む。トウモロコシ畑は家のあるプナから高度差にして1000mほど下った標高3000m以下に位置している。そのため、近いところでもトウモロコシ耕地への移動は半日以上かかる。また、耕地の耕起や播種作業には1週間近く要するため、毎日、この畑に家から通うわけにはゆかないのである。なお、ほとんどの家族は家畜をもっているが、これらの管理は老人や子ども、あるいは親族などに依頼してゆく。

ここで、トウモロコシの出作り小屋のサラ・チュクヤについて述べておこう。サラ・チュクヤは、写真6-15に見られるように周囲は石を積み上げた壁でできており、3m×4mほどの長方形で、屋根はイチユでふいてある。内部には炉がしつらえてあり、調理用の石臼のボタンもあって、食事の準備もできるようになっている。そのため、ここに移り住むときはプナから調理道具や食糧も持参してくる。

植え付けの最後はルキのジャガイモである。これは耐寒性にすぐれ、ほかの作物が寒さのためにほとんど栽培できない標高4000m以上の高地でも栽培できるジャガイモである。このルキのジャガイモ栽培にも家畜の糞が肥料として与えられる。ただし、プナのジャガイモ耕地に大量に施肥したあとでは家畜の糞は残り少なく、残っている分だけ与えられる。

こうして8月から始まった植え付けは10月の末あたりにようやく終わる。この頃には雨季も本格的となって毎日のように雨が降り、それは3月頃までつづく。なお、トウモロコシを播種する9月頃では雨はまだ多くないが、雨にかわって濃い霧が連日のようにたちこめる。この霧や雨のおかげでマルカパタではトウモロコシ栽培にも灌漑を必要としないようである。

ここで、農作業で使われる農具についてもふれておきたい。マルカパタではインカ時代とほとんどかわらない農具が今も使われているからである。図6-10はボマによるインカ時代のジャガイモの収穫風景であるが、この図に示されている踏み鋤と手鋤が現在のマルカパタでも見られる。とくに踏み鋤は休閑地の耕起やジャガイモの植え付けに欠かせないほど中心的な農具となっている。この農具については第7章であらためて詳しく検討する。

収穫は、まだ雨季があげない2月頃から始まる。植え付けた順に収穫作業は進められ、マワイ、チャウピ・マワイ、プナなどのジャガイモ、トウモロコシ、そして最後がルキのジャガイモと収穫はつづく。とくに、本格的な収穫期を迎えるのは乾季の6月頃で、この時期の彼らは出作り小屋で過ごす日が多くなる。たとえば、トウモロコシの収穫では家族の大半が出作り小屋に1～2週間も移り住んで、毎日、朝から夜まで収穫の作業をつづける。収穫したトウモロコシは1週間ほど野天に広げ、天日で乾燥する⁸⁾(写真6-16)。そして、リヤマや馬などで輸送し、プナにある家に持ち帰るのである。

6～7月は乾季のなかでも、最も乾燥し、また1日の気温変化がきわめて激しい時期



図 6-10 踏み鋤 (左) と手鋤 (中央) によるジャガイモの収穫
 [Guamán Poma 1980 (1613)]



写真 6-16 天日によるトウモロコシの乾燥

である。プナのような高地では夜間の気温は氷点下まで下がり、気温の日較差は摂氏20～30度に達する。このような熱帯高地特有の気候条件を利用して、この時期には伝統的な食品加工がおこなわれる。ひとつはチャルキと呼ばれる干し肉の加工である。もうひとつが、なんだか言及したチューニョの名前で知られる凍結乾燥ジャガイモの加工である。なお、この加工法についても第8章で詳しく報告する。

最後に彼らの家畜飼育についても簡単に述べておこう。先述したように、主な家畜はリヤマとアルパカ、そしてヒツジである。家畜頭数は世帯によって異なるが、おおまかにいうと、1家族あたりの平均的な家畜頭数は、50頭前後である。作物の栽培と違って、これらの家畜の放牧はほとんどプナの高地だけでおこなわれる。先に述べたように、リヤマのみは輸送用の駄獣としてかなり低地部まで、ときにユンカと呼ばれる森林地帯までくぐることもある。しかし、アルパカやヒツジはリヤマと違って、食べられる植物がかぎられるため、その放牧はほとんどプナにかぎられる。とくに、乾季のプナはほとんどの植物が枯れてしまうため、先述したように雪解け水によってできた湿地帯に家畜を移動させ、そこで放牧する。このようなところには家畜番小屋があり、そこで寝泊まりする。ただし、家族の全員が移り住むわけではなく、家族の一部だけ、ふつうは子どもたちが一時期移り住んで家畜の番をする。また、トウモロコシやジャガイモ栽培のために家族が出作り小屋に移り住んでいるときも、やはり子どもたち、あるいは老人などの家族の一部がプナに残って家畜の面倒を見るのである。

こうして見てくると、「高原の人」と呼ばれるように、先住民が高地に住む理由がわかる。まず、リヤマやアルパカは高地に適した家畜であり、その放牧のために草原のある高地に居住地をもつ必要がある。また、ジャガイモも寒冷高地に適した作物であり、しかもその栽培には家畜の糞が肥料として欠かせない。このような寒冷高地に適した農牧複合の生業のために、彼らはプナやスニ帯などの高地に住んでいると考えられる。

5.2 高度差利用

先述したように彼らは標高4000m前後のプナ帯に居住地をもつが、彼らの暮らしは高地部だけにかぎられるわけではない。そこで、これまで述べてきたことを模式図6-11を使ってまとめておこう。

高地部の方から見てゆくと、家畜の放牧は標高約4000m前後から上に広がる草原地帯が中心になる。放牧の中心となる家畜は先述したようにリヤマとアルパカであるが、ヒツジも多い。これらの家畜のうち、リヤマはかなり広い高度域を移動することが可能であり、荷を積んだリヤマはしばしばプエプロにもくだってくる。一方、アルパカはプナの牧草しか食べないため、その放牧は標高約4000m以上の高地にかぎられる。とくに、牧草が乏しくなる乾季は、雪解け水によって湿地状になった部分にしか食べられる草がないため、そこに家畜番小屋をもち、その周辺で放牧するのである。

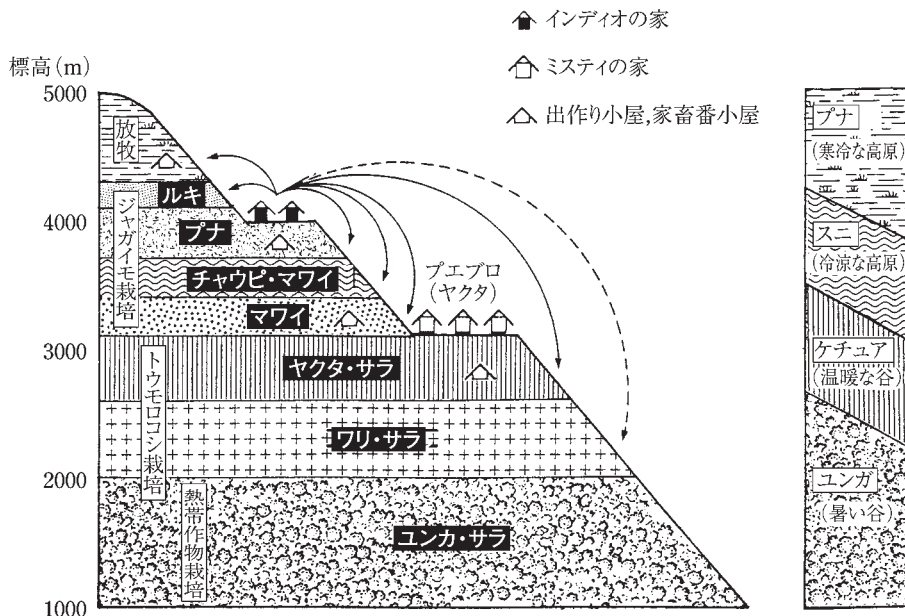


図 6-11 コヤナ共同体における高度差利用

ジャガイモ畑は標高4300mあたりから標高3000mあたりまで連続して見られる。このようにジャガイモ畑は1000m以上もの大きな高度差のなかに連続しているため、植え付けや収穫の時期、栽培方法などが異なる4つの耕地にわけられるのである。これらの耕地こそが、共同体の共同耕地である。

さらに低いところ、標高3000m以下にある共同耕地がトウモロコシ用である。先述したように、トウモロコシも栽培される高度により3つのグループにわけられ、それぞれ、ヤクタ・サラ、ワリ・サラ、ユンカ・サラと呼ばれる。このうち、ヤクタ・サラは標高3000mあたりのプエプロ（ヤクタ）近くの共同耕地で栽培されるトウモロコシのことで、最も味がよいとされる。ワリの意味は明らかではないが、標高2400mあたりの共同耕地で栽培されるトウモロコシのことである。そして、先述したようにユンカは低地のことで、ユンカ・サラ（ユンカのトウモロコシ）は低地の森林地帯にある私有の耕地で栽培される。

コヤナ共同体の人たちが栽培しているのはほとんどヤクタ・サラであり、一部の人たちだけがワリのトウモロコシを栽培している。ヤクタ・サラもワリ・サラも家から1000mほど谷をくだったところにあるため、ほとんどの人が植え付けや収穫の時に作業をするための出作り小屋をもつのである。

以上見てきたようにマルカパタでは、共同体ごとに、その領域の最下部にトウモロコシ耕地が位置しているため、高地部に居住地をもつ先住民たちは、トウモロコシを耕作



写真6-17 トウモロコシの共同耕地とサラ・チュクヤ

するためにここまで下りてこなければならない。それを具体的に見てみることにしよう。写真6-17は、先に示した写真6-13の一部で、ちょうどマルカバタ・コヤナとサワンカイの共同耕地が接している部分である。中央の小流が、この2つの共同耕地を東西にわけているコスコーノである。また、耕地内に白い点として見えるものは、トウモロコシの出作り小屋のサラ・チュクヤである。

そこで、サラ・チュクヤを指標に、共同耕地内の耕地所有者の居住地を概観してみよう。各耕地の使用者は、それぞれの耕地内にサラ・チュクヤを所有しているため、その小屋の所有者がわかれば、どの村から、ひいてはどの共同体から、この耕地にトウモロコシ耕作に来ているかが、明らかになるのである。

表6-5は、写真6-17に見られるサラ・チュクヤの番号、所有者、居住している村、所属する共同体を示したものである。この表から、コスコーノの小流を境として、左側に位置するサラ・チュクヤはNo. 34をのぞいて、すべてサワンカイ共同体に所属する村びとのものであり、その反対側はほとんどコヤナ共同体に属している村びとのものであることがわかる。

表6-5 サラ・チュクヤの所有主と居住地

サラチュクヤ番号	所有主	居住地	所属コミュニティ
13	P. S.	ラッコ	マルカパタ コヤナ
14	M. L.	カチカチ	〃
15	C. H.	ラッコ	〃
16	J. M.	チュンピ	〃
17	J. M.	マルカラニ	〃
18	S. P.	マルカパタ*	〃
20	J. S.	ラッコ	〃
21	D. S.	カーチャパタ	サワンカイ
22	M. M.	ラッコ	マルカパタ コヤナ
23	L. C.	〃	〃
24	P. C.	チュンピパタ	〃
25	A. G.	マルカパタ*	サワンカイ
26	G. Q.	カンチャパタ	〃
27	S. F.	〃	〃
28	A. K.	マユバンバ	〃
29	P. C.	ラッコ	マルカパタ コヤナ
30	V. K.	マユバンバ	サワンカイ
31	F. P.	カンチャパタ	〃
32	Q. R.	〃	〃
33	T. S.	〃	〃
34	F. E.	ウイスカチャニ	マルカパタ コヤナ
35	A. R.	カチ	〃
36	A. F.	マユバンバ	サワンカイ
37	R. Q.	〃	〃
38	R. R.	〃	〃

*印は、ミスティ

コヤナ共同体の13のサラ・チュクヤの所有者の居住地の内訳は、ラッコが6、カチカチ、カチ、チュンピ、チュンピパタ、マルカラニ、ウイスカチャニ、プエプロがそれぞれ1である。これらは、いずれもチュンピ川の2本の流域に散在している集落で、とくにマルカラニやウイスカチャニはチュンピ川の源頭、標高4300mあまりの高地に位置する集落である。一方、サワンカイ共同体に所属する12のサラ・チュクヤの所有主の居住地はカンチャパタが6、マユバンバが5、プエプロが1である。マユバンバの標高については不明であるが、カンチャパタも標高3700mの高地に位置する村である。これらのことから、各共同体のトウモロコシ用共同耕地には、それぞれの共同体の各地の村から、ときに1000m以上の標高差を下ってトウモロコシ耕作にやってきていることがわか

る。

こうして、彼らは出作り小屋や家畜番小屋を利用して、1年中、アンデスの東斜面を上り下りする暮らしを送っているのである。なお、これらの作物の栽培および家畜の飼育は基本的に家族単位でおこなわれているが、各家族で勝手に植え付けや収穫をしているわけではない。先に述べた耕地は、それぞれが成員権をもつ共同体の耕地である。そして、そこでの植え付けも収穫も共同体の寄り合いで決められた時期におこなわれるなど、共同耕地の利用に関しては共同体の様々な規制があるわけである。

5.3 栽培技術

これまで述べてきたように、マルカバタの先住民の農耕はトウモロコシとジャガイモを主作物としておこなわれている。そこで、以下でトウモロコシとジャガイモの栽培技術について報告する。

5.3.1 トウモロコシの栽培

前年に収穫されたトウモロコシはキク科の植物、スンチュ (*Viguinera* sp.) の茎で編んだ筒状の篋の容器、タッケ (*takke*) にいれて保存されている (写真6-18)。播種にさいしては、まずトウモロコシ粒を穂軸からはがす作業、ムフチャイ (*mujuchay*) がおこなわれる。トウモロコシの果穂全体はムフ (*muju*) といわれるが、この果穂上部 (*uma muju*) と下部 (*ura muju*) は発芽力が劣ると考えられており、種子に使われるのは果穂の中央部 (*chawpi muju*) だけである。したがって、両手を使って穂軸からトウモロコシの穀粒をはがしながら、播種用と播種に適さないものの2つにわけてゆく。後者は家畜の飼料とされる。

トウモロコシの耕地は、先に述べたように、すべて標高3100m以下のところにあり、いっぽう大半の集落は標高3500mから4000mあまりのところに位置している。したがって、トウモロコシ耕地への移動には半日以上かかることも珍しくない。また、耕地の耕起や、播種作業、収穫作業などは1週間近くの日数を要するため、家族のほとんどが一時期集落を離れ、トウモロコシ耕地にある出作り小屋、サラ・チュクヤに移りすむのである。なお、先述したように家畜をもっている家族は、その家畜の管理を老人や、親族、知人などに依頼してゆく。

播種にさきがけて、まず耕地の整地作業、アルチャクイ (*alchacuy*) がおこなわれる。トウモロコシの耕地は毎年耕作され、前年の収穫後、半年ほど放置されていたけなので、雑草も耕地全面をおおうことはあまりなく、雑草の刈りとりに使われる道具も鎌、キトゥチ (*kituchi*) が主となる。なお、ワリ・サラやユンカ・サラの場合は高度が低いので、雑草は草本類だけでなく、灌木類もまじっているため、山刀 (*machete*) で刈り払われる。こうして、刈りとられた雑草は数日乾燥させたあと、耕地のなか、数カ所に



写真 6-18 トウモロコシの貯蔵籠, タツケ



写真 6-19 アイニによる共同作業。踏み鋤による耕起作業

集めて燃やす。この灰は、肥料として大きな役割をはたすと考えられている。

この耕地の耕起作業では、しばしば親族内での労働の交換、アイニ (*ayni*) が見られる (写真 6-19)。たとえば、ある親族に耕起作業を手伝ってもらった場合、翌日はその世帯の耕起作業を手伝うというように、等量の労働力の交換がおこなわれる。これは、トウモロコシ耕地での作業が集落を離れ、かぎられた時間内で終わらなければならないからである。ただし、このアイニはトウモロコシ耕地の耕起作業にかぎらず、収穫作業やジャガイモ栽培でも見られ、親族間の互酬的な関係をよく示すものといえる。

このアイニが、主として先住民間でおこなわれるのに対し、ミステイとインディオ間ではしばしばミンカ (*minka*) と呼ばれる協力関係が見られる。アイニが労働と労働と

の交換であるとする、ミンカは労働と物との交換である。すなわち、ミスティの農作業に対する先住民の労働の提供に対して、ミスティは食事やココア、タバコ、酒などを与え労働力の不足を補うのである。

このミンカもアイニも、共同体の規制で共同耕地の作業を期間内に終える点で大きな効果がある。そして、その背景には共同体の成員が地縁血縁的な色彩の濃い紐帯によって強い関係をもっているという事実がありそうだ。

播種作業は種子を腰にまいた布、マンタ (*manta*) にいれ、片手にラウカーナ (*raucana*) と呼ばれる鋤をもっておこなわれる。このラウカーナで50cm間隔くらいで溝に穴を掘り、そこに3~5粒ずつ播種し、土をよせる。1カ所に、このように多くの種子をまくのは、播種後、降雨を見てもしばらく晴天がつづくシルホイ (*siruhui*) という甲虫の幼虫が幼苗を食べてしまうためだとされる。しかし、このように多く播種しても、この害虫によって、かなりの被害をうけることがふつうで、そのようなところには、あらためてソラマメが播かれ、じっさいにはトウモロコシとソラマメの混植といった印象さえうけるほどである。

トウモロコシと豆類との混植は新大陸の伝統農業では広くおこなわれていることが知られている [Sauer 1946: 498-503; ほか]。Donkinによれば、この混植は耕地の休閑の必要性を小さくするものである、という [Donkin 1979: 2]。豆類を栽培すると根瘤菌が窒素固定作用をおこなうため、土壌中の養分回復に役立つからである。マルカパタの場合も、結果的にトウモロコシと豆類の混植をしていることになり、それが連作されるトウモロコシ耕地の地力回復を助けていると考えられる。

播種後約1カ月を経た11月頃に、1回目の溝さらい、ニャウチャスカ (*ñauchaska*) をおこなう。この作業もやはりラウカーナを使い、溝のなかに新しく生えてきた雑草をぬきとるとともに、畝のくずれたところの土をすくって、溝をさるう。マルカパタでは、先述したように灌漑設備はまったくないが、この作業は耕地の保水力を高める役目をはたしていると考えられる。

さらに1カ月を経た12月には、トウモロコシは草丈30cmあまりになっているが、この時期はコトゥスカ (*kotuska*) と呼ばれる作業がおこなわれる。施肥である。トウモロコシの根元に施肥したあと、畝をくずして土をかぶせる。12月頃のマルカパタはもうかなり降雨量が多くなっているため、溝を作っておく必要はないのであろう。しかし、実際に施肥する者は少ない。施肥したヤクタ・サラヤワリ・サラは味がまずくなるといわれているせいかもしれない。ただし、トウモロコシの収穫後、耕地にはウシやウマ、リヤマなどが放たれ、刈り跡放牧がおこなわれるので、これが施肥のかわりをしている可能性がある。

2月か3月頃、最後の除草作業 (*kachupaska*) をおこなったあと、6月の収穫 (*saratipiy*) を迎える。なお、播種作業後の除草や施肥などの作業については家族全員が来る必要は

なく、1～2人が作業にあたる。

トウモロコシの収穫作業は、次のようなものである。播種のとくと同じように、ほとんどの家族が山を下って、サラ・チュクヤに泊まりこんで収穫にあたる。収穫法は果穂だけをもぎとって、サラ・チュクヤの周辺部で乾燥作業、テンダラスカ (*tendaraska*) をおこなう。トウモロコシの皮は、ティピーナ (*tipina*) と呼ばれるペーパー・ナイフ状のものではがし、天日で数日から1週間ほど乾燥する。

ところで、この収穫のとき、家畜をもっている家族は、アルパカやヒツジを残してリヤマや馬などの運搬用の家畜をつれてくる。そして収穫の終わった共同耕地の門をとりはずし、そこに家畜を放つ。このトウモロコシ耕地は、かつてはまったく肥料をやらなかったといわれ、現在も肥料を与えていないところがあることから、先述したようにこれは一種の刈り跡放牧ではないか、と考えられる。また、牧畜の側から見れば、乾季は高地の牧草が不足するときであり、このような刈り跡での放牧が牧草の不足を補うものとしての役割をはたしている、と思われる。

5.3.2 ジャガイモの栽培

種イモはいずれも前年の収穫後に高地部で貯蔵されたパパ・プナが使われる。「papa puna は sana (健康) である」といわれるように、マワイやミシュカなどのような低いところで栽培されたジャガイモは病気に犯されていることが多いからである。実際、ミシ



写真 6-20 マワイの耕地での火つけ

ユカやマワイのジャガイモにはウイルスに犯されたと思われるのがかなり見られたし、それに対する対策も次第に重要な問題となりつつある。

また、種イモを高地で貯蔵するのは、低温によって貯蔵の発芽を防ぐためでもある。低いところで貯蔵した場合、播種前に発芽してしまい、発芽力の劣化を引きおこすのみでなく、この発芽した芽をとる作業、カチュ・ルスカ (*kachu luska*) が加わるからである。

種イモはつい最近までプナの耕地の横に石垣を積んでつくられたフクナ (*fukuna*) と呼ばれる貯蔵穴に貯蔵していたが、貯蔵中のジャガイモがしばしば盗まれたので使われなくなった、といわれている。現在は家屋敷地内の一隅に貯蔵するのがふつうである。この場合も、できるだけ低温下に貯蔵することがのぞましく、家屋敷地内の一隅にわらを敷き、その上にジャガイモ、そしてその上をイチユでおおい、石をのせておく。

ジャガイモ耕地は少なくとも4年間の休閑をおこなうため、新しく播種するところはいずれも雑草でおおわれている。とくに、マワイの耕地はプナに比べて標高が低いいため、小灌木を含む雑草の繁茂がはげしい。このため、マワイのジャガイモ栽培では、植え付け前に、ユハスカ (*yujaska*) と呼ばれる休閑地の耕起作業がおこなわれる。ユハスカは、先に述べたトウモロコシ耕地の耕起作業と基本的に同じで、踏み鋤を使って、土地をおこす。トウモロコシの耕地は毎年使われているのに対し、ジャガイモの場合は数年間は休閑し、また芝生状の植物も密生しているため、耕地はきわめて固くなっている。したがって、雨季があける前の3月頃、降雨で土壌が比較的やわらかくなっているときに、ユハスカをおこなう。おこされた土塊は、その後につづく乾季に乾燥させ、雑草を枯死させるのである。

マワイ用の耕地では播種前に再度この耕地の耕起や、整地作業をおこなう。つまり、8月か9月頃には、1度耕起された土地に、再度雑草、とくに芝生状に密生するグラマが生えていることが多い。したがって、上記の作業をくりかえしたあと、雑草を集め、数日乾燥したあと、火をつけて燃やす(写真6-20)。この灰は肥料として役立つといわれており、燃やすときも1カ所ではなく、数カ所で、できるだけ広い範囲に、この灰が散布できるように配慮してある。

ジャガイモの植え付け前に、もうひとつ大きな作業が残されている。共同耕地の周囲にめぐらされている垣根、ピルカの修復である。トウモロコシの共同耕地の場合は、毎年使用されるため、その修復も一部にとどまるが、ジャガイモの共同耕地は数年放置されていたため、崩壊している部分が多い。したがって、この垣根の修復作業、ピルカスカ (*pirkaska*) は、共同体の集会で日程や役割を決めて、共同体の共同作業としておこなわれるのである。すなわち、道路に面した部分には石垣を積みあげたり、トゲのあるブッシュなどを置いて家畜の侵入を防ぐ。また、この耕地が道を横切っている場合などは、石を積み上げて道を遮断し、そこには先述したひらき戸をつくるか、人なら通過できるトゲのある枯木などを置いておく。なお、ミシュカのジャガイモ耕地のピルカスカ

では、先に述べたミンカなどの関係を利用して、世帯ごとに個別におこなう。共同耕地は、各世帯が耕作する土地が決まっており、露岩、段状になったところで境界が決められているので、この境界内で、世帯ごとで作業はおこなわれる。

種イモは、先に述べたように、プナで貯蔵してあるため、リヤマや馬などを使って耕地まで運びおろし、イモの大きいものは半分に分けて使う。また、プナではこれと同時に、リヤマ、アルパカ、ヒツジなどの家畜の糞 (*wañu*) が肥料として耕地に運びこまれる。肥料としては、ヒツジの糞、リヤマやアルパカの糞を混ぜたものを使う。これらの糞は、ワニュー・ワシ (*wañu wasi*) と呼ばれる肥料小屋に貯蔵してある。自分たちで使うだけでなく、家畜をもたない人たちに売ったり、品物と交換することもある。

なお、施肥の必要があるのは、プナ、チャウピマワイ、そしてルキの耕地で、マワイは肥料を与えない。マワイの休耕地には雑草や灌木が繁茂し、これを燃やした灰が肥料としての役割を果たしているからであるとされる。

ジャガイモの播種作業もやはり踏み鋤が使われる。耕地の斜面下部から上部にむかって、50cm くらいの間隔で踏み鋤で穴をあけてゆく。この列と列との間の距離は80cm ほどである。この播種作業は、一般に男が耕地に穴をあけてゆき、それを追うような形で女がイモを2~3個、この穴にいれ土をかぶせる。施肥 (*wañu chulay*) は、この作業の2~3日後から1カ月間くらいのあいだにおこなわれる。

播種後1カ月くらいで、ジャガイモは土中から少し芽をだしてくるが、この段階でプナのジャガイモの場合は植え付けた列の横に溝を掘る。やはり、踏み鋤を使って、深さ20cm、幅30cm くらいの溝をつけ、掘り起こした土は発芽したジャガイモのまわりに盛り土される。トウモロコシの場合とは反対に、イモの部分が浸水すると腐ったり、よいイモができないからである。

このあと、これらのジャガイモ耕地は2~3回除草され、3月頃から5月頃にかけてマワイ、チュピ・マワイ、プナ、ルキの順で次々に収穫される。ただし、これらのジャガイモは、その年の降雨量や気温などによって収穫までの期間が異なるため、耕地の1部の探り堀り、ピティキニヤ・ママ (*pitikiña mama*) の作業のあと、収穫日が決められる。収穫作業は、家族単位でおこなわれるが、トウモロコシの収穫の場合とは異なり、収穫されたイモはその日のうちにリヤマや馬などで運搬、集落にもちかえられる。ジャガイモ耕地にもトウモロコシの出作り小屋、サラ・チュクヤに類似したパパ・チュクヤ (*papa chuklla*) が見られる。ただし、パパ・チュクヤはサラ・チュクヤのような石造りではなく、きわめて簡易的なものである。そのため、この小屋に寝泊りすることは少なく、昼食や降雨のときに利用する。また、パパ・チュクヤをもたない家族は、ビニールなどを使った一時的な小屋をつくる。このようなトウモロコシとジャガイモの収穫における違いは、ジャガイモの収穫の方が容易で、またトウモロコシのように収穫後乾燥させる必要もないなどのためである。さらに、耕地と集落との距離も関係している。すな

わち、ジャガイモ耕地は、一般に集落から近く、日帰りも十分に可能な距離に位置しているのである。

イモ類について最後にふれておかなければならないのは、凍結乾燥イモの加工である。先のルキと呼ばれるジャガイモは、苦味が強くそのままでは食用とならないが、これは凍結乾燥イモに加工してはじめて食用となる。ルキのほかにも、収穫されたジャガイモの一部や、オカのほとんどが凍結乾燥イモに加工され、重要な貯蔵食品となる。

凍結乾燥イモの加工は、ジャガイモやオカの収穫終了後の乾季、とくに6月から7月にかけて、標高4000m前後の高地部でおこなわれる。この時期の高地部は、1年を通じて最も気温の日較差が大きく、最低気温は氷点下にまで下り、また湿度も最も低い。凍結乾燥イモは、このような気象条件を利用して加工されるため、この時期に各共同体の高地部、とくにアスターナ (*astana*) と呼ばれる家畜番小屋でおこなわれる。それは、マルカパタ・コヤナでは、チュンピヤラッコの上部地帯、プイカではコリニから上部の高地部である (写真6-21)。

マルカパタにおけるジャガイモの凍結乾燥イモはチューニヨ (*chuño*) と呼ばれるものとモラヤ (*moraya*) の2つがある。チューニヨは野天にジャガイモを1~2日放置し、日中の気温上昇と夜間の低温を利用して、イモの凍結、融解を1~2回くりかえし、やわらかくなったイモを足で踏んで脱水、乾燥させたものである (写真6-21)。



写真6-21 チューニヨの加工。凍結、融解後のイモを脱水しているところ

モラヤはチューニョづくりのプロセスのうちで足で踏んで脱水したあと、これを水に約15日ほどつけて水で晒し、乾燥させたものである。この水晒しは流水の方がよいため、小川の川岸近くに石で仕切った、ジャガイモの水晒し用の穴、モラヤ・トコ (*moraya toko*) がつくられる。この穴にイチュをしき、ジャガイモをいれたあと、さらにイチュでおおい、水に流されないよう石をのせて置く。チューニョ、モラヤの材料とされるジャガイモの品種について詳しい情報は得られなかったが、少なくとも苦味のあるジャガイモのルキはすべてモラヤに加工される。

オカの凍結乾燥イモ、カーヤ (*caya*) もその加工法は基本的にモラヤと同じである。ただ、水につけておく期間が一般に2カ月ときわめて長いため、世帯ごとに、毎年イモを水につけるための穴、カーヤ・トコ (*caya toko*) がもうけられている。直径、深さとも1m前後で、小川から小流がひかれ、穴の水がつねにかわるように工夫されている。このようにして加工された凍結乾燥イモは干し肉 (*charque*) などとともに、貯蔵食を意味するワタ・ミフイ (*wata mijuy*) と称され、マルカパタの農牧民にとって不可欠なものとなっている。じっさい、オカなどはそのままの状態ではくさりやすいが、カーヤにすると少なくとも1年はもつといわれる。また、ジャガイモもプエプロなどの比較的低いところではすぐに芽がでたりして、調理に好ましくない状態になりやすいが、凍結乾燥イモにすれば長期間保存に耐えうるうえ、乾燥しているため、もとのイモに比べかなり軽く、輸送にも都合がよい。したがって、貯蔵食品としてだけでなく交換用の品物としても、しばしば使われるのである。

さらに、高度差利用という観点から見た場合、モラヤの加工法の存在はルキという苦味はあるものの耐寒性が強く、ふつうのジャガイモでは生育不可能な高地まで利用可能にした点で、大きな役割をはたしているといえるだろう。なお、これらの凍結乾燥イモの加工法やその特徴については第8章で検討する。

5.3.3 100種類のジャガイモ品種

このジャガイモ栽培を見ていて驚かされることがある。それは、栽培されているジャガイモにきわめて多くの品種があることだ。先に、マルカパタではジャガイモの栽培ゾーンは4つにわけられ、ルキ、プナ、チャウピ・マワイ、マワイと呼ばれると述べたが、これらの名称はジャガイモの品種を示しているわけではない。たとえばルキやプナは、パパ・ルキとか、パパ・プナと呼ばれ、それぞれ、「ルキのジャガイモ」、「プナのジャガイモ」を意味するが、単一の品種ではなく、そこで栽培されるジャガイモの品種をいくつも含んでいる。これは、チャウピ・マワイやマワイも同様である。そして、最も多くの品種が含まれるのがパパ・プナで、数十種類の品種があり、マルカパタ全体としては約100種類の品種が栽培されている。

ちなみに、先述したようにトウモロコシも高度によってヤクタ・サラ、ワリ・サラ、

ユンカ・サラと分けられ、それぞれにいくつも品種があるが、すべてをあわせても30～40種類でしかなく、ジャガイモ品種の多さはトウモロコシのそれを圧倒している。

このうち、コヤナ共同体で栽培されている58品種を国際ポテトセンターに持ち帰り、試験場で栽培した。そして、植物体やイモの形態などの観察結果を示したものが表6-6である。植物体ではあまり大きな変異はないが、染色体の倍数性では2倍体から5倍体まで見られる。そして、イモの多様な形態には驚かされる。イモの大きさや形、色、さらに目の深さや数などに様々な変異が見られるからである(図6-12)。

このようなイモの形態に注目して村びとはジャガイモを分類し、品種名をつけている。とくに、イモの色と形に注目して分類していることが品種の呼称からわかる。ただし、ジャガイモの分類はイモの形態によるものだけでなく、用途によるものもある。それが表6-6の用途に示したムンダ(*munda*)、ワイコ(*huayco*)、チューニョ(*chuño*)の3分類である。このうち、ムンダは煮くずれしにくいジャガイモであり、スープ用である。ワイコは粉質のジャガイモで、蒸し焼き用である。そして、チューニョは先述したように加工用である。

それではマルカパタの村びとは何のためにこれほどジャガイモを細かく分類しているのだろうか。また、何のために多様なジャガイモ品種を栽培しているのだろうか。このような疑問に対しては村びとに聞いても「習慣だから」という答えしか返ってこない。そこで少し推理してみよう。多様な品種の存在は大きな高度差のなかでのジャガイモ栽培と密接な関係があるのではないか。大きな高度差のなかには高度によって少しずつ気温や降水量などが異なる多様な環境があり、そこでジャガイモをできるだけ多く栽培しようとするれば多様な品種が必要になるというわけである。

しかし、これだけでは100種類ものジャガイモ品種をひとつの村で栽培する理由としては十分ではないだろう。そこで、他の理由も探して見たところ、興味深い習慣が見つかった。それは、マルカパタではひとつのジャガイモ畑に単一の品種だけを植えるのではなく、しばしば20種類も30種類も混ぜて栽培する方法である。その具体的な例を示しておこう。図6-13は標高約3900mに位置するプナの共同耕地の一部で見られたジャガイモ品種である。このように畑の一部だけを見ても、2倍体、4倍体、そして5倍体のジャガイモもあり、品種のうえでは30種類を超えるものが見られる。

このような栽培方法があればマルカパタの村全体として約100種類ものジャガイモ品種があっても不思議ではない。ここで例にあげたのは共同耕地の一部であるし、ジャガイモの共同耕地はプナの上にも下にもあるからである。ただし、ここで別の疑問が生まれるであろう。すなわち、ひとつの畑で何のために20種類も30種類も栽培するのかという疑問である。

その理由のひとつとして考えられるのが、多様な品種の栽培による危険の分散である。先にマルカパタのジャガイモは形態や色などが異なっていることを指摘したが、これら

表6-6 マルカパタのジャガイモ品種とその特徴 [山本 2004]

番号	呼称 (現地名) ¹⁾	呼称の意味	倍数性 ²⁾	用途 ³⁾	花色	イモの皮の色	イモの形	目の深さ
1	アルカイ・ワルミ (alqay warmi)	まだら模様的女性	4x	ムンダ	薄い紫	濃い赤	偏平	中間
2	アロス・コヤ (arroz k'olla)	粉質の穀物	4x	ムンダ	薄い紫	オレンジ	球形	中間
3	プカ・マクタチャ (puka maqt'acha)	赤い若者	4x	ワイコ	薄い紫	ピンク	楕円形	浅い
4	トゥルーニャ (t'urña)	泥の道	2x	ワイコ	濃い紫	濃い紫～黒	球形	深い
5	ワヤタ (huallata)	高地にいる鳥の名前	2x	ワイコ	白	濃い紫～黒	球形	深い
6	ヤナ・スリ (yana sole)	黒い果実	4x	チューニヨ	白	濃い紫～黒	球形	浅い
7	レケ・チャキ (leq'è chaki)	ガビオタ (鳥) の足	?	ムンダ	濃い紫	紫	矩形	浅い
8	プカ・マワイ (puka maway)	赤い早生のジャガイモ	3x	ムンダ	濃い紫	紫がかった赤	球形	中間
9	カサ・ブランカ (casa blanca)	白い家	4x	チューニヨ, ムンダ	濃い紫	乳白	球形	浅い
10	ミシユキラ (misk'ila)	甘いジャガイモ	4x?	ワイコ	濃い紫	紫がかった赤	偏平	中間
11	バーニャ (baña)	?	3x?	チューニヨ, ワイコ	濃い紫	紫がかった赤	細長	中間
12	プマ・センカ (puma senqa)	ピューマの鼻	4x	チューニヨ, ワイコ	濃い紫	濃い紫～黒	矩形	深い
13	ユーラフ・ロモ (yuraq lomo)	白い山 (または白い背中)	4x	ワイコ	濃い紫	乳白	長い矩形	中間
14	クッシ (k'usi)	黒のまだら模様	4x	チューニヨ	濃い青	濃い紫～黒	卵形	浅い
15	ボーレ (bole)	べしゃんこ	4x	ムンダ	青	紫がかった赤	球形	浅い
16	マクタ・ロモ (maqta lomo)	若い山	4x	ワイコ	濃い青	濃い紫～黒	矩形	中間
17	スーリ (suli)	有毒の果実	4x	チューニヨ, ムンダ	濃い紫	紫がかった赤	球形	中間
18	マクタチャ (maq't'acha)	若者	4x	ワイコ	濃い紫	濃い紫～黒	長い矩形	中間
19	イラライソ (iraraiso)	?	3x?	?	濃い紫	紫がかった赤	偏平	深い
20	クチュ・パキ (k'uchu p'aki)	こわれた物置	4x	ワイコ	濃い紫	紫がかった赤	偏平	深い
21	ヤナ・マクタ (yana maqt'a)	黒い若者	4x	?	濃い紫	紫	長い矩形	中間
22	チュケ・ホロ (ch'eqe foro)	ちらばった羽	2x?	ワイコ	濃い紫	紫	偏平	深い
23	チマコ (chimako)	蛇のような形	2x?	ワイコ	濃い紫	緑がかった黄	楕円形	深い
24	ユーラク・チマコ (yuraq chimako)	白い蛇のような形	2x	ワイコ	濃い紫	緑がかった黄	楕円形	中間
25	コミノ (comino)	クミン (香料)	2x	ワイコ	濃い青	紫がかった赤	矩形	中間
26	ケクーヨ (k'equillo)	ぐるぐる巻き	4x	チューニヨ	濃い青	濃い紫～黒	紡錘形	中間
27	ケウ・ボーレ (q'ello bole)	黄色くて丸い	2x	ワイコ	濃い青	黄	球形	浅い
28	ヤナ・ロモ (yana lomo)	黒い山 (黒い背)	3x	ワイコ	濃い紫	紫	倒卵形	中間
29	リマ・ウイラコチャ (lima wiraqocha)	リマのウイラコチャ (紳士)	2x	ワイコ	濃い紫	黄	楕円形	中間
30	ユーラク・ロモ (yuraq lomo)	白い山 (背)	5x?	ワイコ	濃い青	乳白	楕円形	中間
31	バルミート (palmito)	ヤシの新芽	4x	チューニヨ, ムンダ	濃い青	紫がかった赤	矩形	中間
32	ハイニャチュ (jayñachu)	種雄	3x?	チューニヨ	濃い紫	乳白	矩形	深い
33	ワリタチャ (waltacha)	帯でむすんだ	4x	チューニヨ	薄い紫	乳白	矩形	浅い
34	マリバ (mariba)	(改良品種)	4x	チューニヨ, ムンダ	薄い紫	紫がかった赤	球形	中間
35	パコ・イミーヤ (pako emilla)	面倒な女性	4x	ムンダ	白	緑がかった黄	球形	深い
36	ムル・マワイ (muru maway)	赤い早生		ムンダ, ワイコ	濃い紫	赤	球形	深い
37	トコチ (tokochi)	?	2x	ワイコ	濃い紫	紫	偏平	深い
38	ウンチューニャ (unchuña)	運搬用布	4x	ワイコ	薄い赤	紫	偏平	深い
39	ブル・ルントーサ (puru luntosa)	半焼けの卵	4x	ワイコ	濃い紫	紫	偏平	深い
40	ハク・ワヤカ (jaku wayaka)	粉の入った袋	3x?	ワイコ	濃い紫	紫	倒卵形	中間
41	プカ・ボレ (puka bole)	赤くて丸いもの	4x	ムンダ, チューニヨ	薄い紫	紫がかった赤	球形	中間
42	コンビス (qompis)	毛布 (睡眠用)	4x	ムンダ, ワイコ	白	緑がかった黄	偏平	深い
43	カタウイ (k'atawi)	灰色の泥	2x	ワイコ	濃い紫	濃い紫～黒	偏平	中間
44	アマカーヤ (amakhaya)	カーヤに似たイモ	2x?	チューニヨ	濃い青	濃い紫～黒	矩形	中間
45	アルカ・ミシユキヤ (alqa miskilla)	まだら模様の甘いもの	4x	ワイコ	濃い紫	紫がかった赤	球形	中間
46	ヤナ・トゥルニャ (yana t'uruña)	黒い泥の道	2x	ワイコ	濃い紫	濃い紫～黒	矩形	深い
47	ヤナ・チュルスビ (yana churuspi)	鳥の黒いくちばし	2x	ワイコ	濃い赤	濃い紫	矩形	中間
48	プカ・イミーヤ (puka emilla)	赤い女性	4x	ムンダ	白	紫がかった赤	球形	深い
49	プカ・ロモ (puka lomo)	赤い山 (背)	4x	ワイコ	濃い紫	紫	矩形	中間
50	クチ・アカ (khuchi aka)	?	2x	チューニヨ, ワイコ	濃い赤	濃い紫～黒	矩形	中間
51	ジプタ (llipta)	?	4x	チューニヨ	濃い青	濃い紫～黒	矩形	浅い
52	テッレ (t'ele)	全て	2x	ワイコ	薄い赤	濃い紫～黒	偏平	深い
53	チョクヨス (choqllós)	チョクロ (トウモロコシ)	4x	ワイコ	濃い紫	濃い紫～黒	卵形	深い
54	ヤナ・マワイ (yana maway)	黒い早生	4x	ムンダ, ワイコ	薄い赤	濃い紫～黒	偏平	深い
55	ユーラク・ルキ (yuraq ruk'i)	白いチューニヨ用	4x?	チューニヨ	濃い青	濃い紫～黒	偏平	深い
56	チンチェーロ (chinchero)	チンチェーロ (クスコの村)	2x	ワイコ	濃い紫	濃い紫～黒	矩形	中間
57	ウククリ (ukukuli)	熊のジャガイモ	4x	?	薄い青	濃い紫～黒	球形	浅い
58	サワシライ (sawasirai)	クスコ地方の山の名前	4x	チューニヨ	濃い紫	濃い紫～黒	結節状	非常に深い

1) この品種名の大半はケチュア語によるものであり、スペイン語によるものはほとんどない。このことは、これらの品種が農業試験場や種苗会社などで改良された商業品種ではなく、ほとんどがアンデスで古くから栽培されてきた地方品種であることを物語る。

2) 岩永勝博士 (国際ポテトセンター研究員・当時) の同定による。

3) ムンダはスープ用、ワイコは蒸し焼き用、チューニヨは加工用。

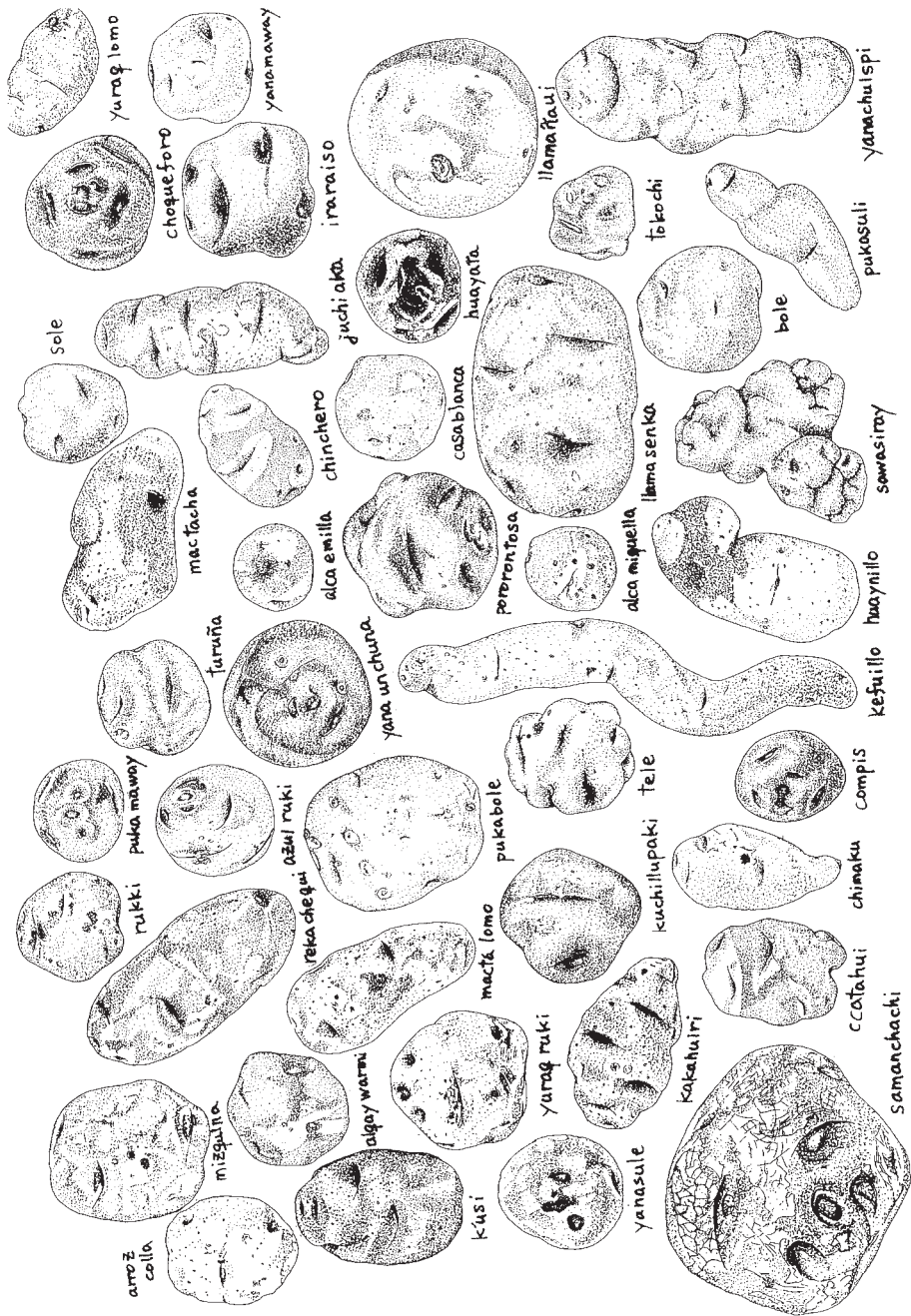
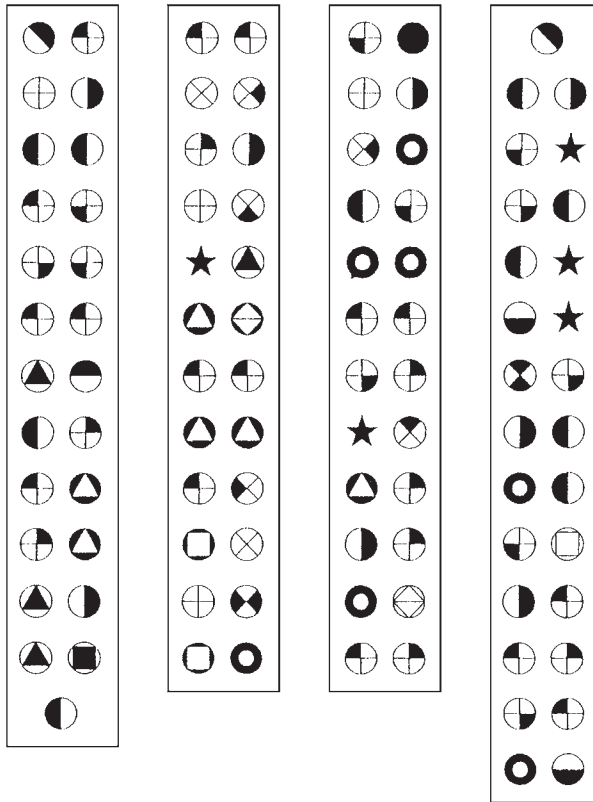


図6-12 マルカバタで栽培されているジャガイモ品種の一部 (満田のぞみ氏の図による)



- | | | |
|-----------------|----------------|---------------|
| ● チェケフォーロ(2X) | ⊗ ルントウーサ(4X) | ⊖ ユーラフ・ロモ(5X) |
| ● トウルーニャ(2X) | ⊗ スーリ(4X) | ▲ ラカチャキ |
| ● トコチ(2X) | ⊗ アルカイ・ワルミ(4X) | ▲ アルカ・イミージャ |
| ● チマコ(2X) | ⊗ プルルントーサ(4X) | ■ リヤマ・ニヤウイ |
| ● ヤナ・ウンチューナ(2X) | ⊗ プカ・ボーレ(4X) | □ プカ・マワイ |
| ⊕ マクタチャ(4X) | ⊗ プカ・スーリ(4X) | ○ プカ・コーヤ |
| ⊕ コンビス(4X) | ⊗ アロス・コーヤ(4X) | ⊙ スア・マンチャチ |
| ⊕ コーヤ(4X) | □ ヤナ・マワイ(4X) | ● ヤナ・パバ |
| ⊕ クシ(4X) | ⊕ ルキ(5X) | ★ イサーニョ |
| ⊕ ボーレ(4X) | ⊕ ユーラフ・ルキ(5X) | |

※ 呼称はすべてケチュア語による
 ※ ()内の数字は倍数性を示す. 無記入は未判定のもの

図 6-13 マルカパタのジャガイモ畑の畝で見られる品種 [山本 2000a]

の品種は形態が異なっているだけでなく、病害虫や気候、さらに環境などに対する適応性も異なっていると判断される。実際に、マルカパタの村びとは、イモの形態の違いだけでなく、それぞれの品種による栽培特性の違いについてもよく知っている。この点についての調査は十分ではないが、少なくとも耐寒性や耐病性、そして雨の多少などに対する適性について熟知している品種が少なかった。したがって、1枚のジャガイモ畑に多様な品種を栽培するのは、やはり収穫の危険性を回避するためであると考えてよさそうである。耐寒性や耐病性などの点で様々に異なる品種を混植することで、天候の異変や病害虫の発生に対して収穫の減少を少しでも防ぐ工夫であると考えられるのである⁷⁾。この点で、先に示したジャガイモ畑の図には興味深い作物が見られる。

それは、マルカパタでイサーニョ、一般的にはマシュアの名前で知られる、ジャガイモとはまったく別のイモ類である。図のなかで、ひとつの畝のなかに1株または2株だけ植えられているのがマシュアである。この混植の理由を村びとに聞くと、しばしば「イサーニョ（マシュア）をジャガイモと混ぜて栽培すると、ジャガイモがよくできる」という答えが返ってくるが、これもジャガイモを病気から防ぐ工夫である。

じつは、マシュアをジャガイモやその他のイモ類と混植する方法はマルカパタだけでなく、中央アンデスでは広く見られる慣行である。また、一部地方ではマシュアを混植することによってジャガイモなどを病気から防ぐと考えられている。そして、実際にマシュアに含まれる物質のなかには、ジャガイモの病気の原因になっているセンチウの駆除に効果のあるイソチオシアネート（イソチオン酸エステル）が含まれているのである [Johns and Towers 1981; Johns et al. 1982]。

5.4 収穫の危険分散

これまで述べてきた大きな高度差を利用した生業の方法が、インカあるいはそれ以前からの伝統であったことは先述したチュパイチュ族やルパカ王国の例でも明らかであろう。さて、それでは、このように大きな高度差を利用した生業の目的は何であろうか。多様な資源を入手するためであることはいうまでもないが、それは食糧を自給するためなのであるか。食糧を自給するためだけに、これほど大きな高度差の利用が必要になるのであろうか。

このように大きな高度差の利用はアンデスを専門とする人類学者のあいだで大きな関心を集め、「垂直統御（パーティカル・コントロール）」論として様々な角度から論じられてきた。そのなかで、人類学者は大きな高度差利用をおこなう理由を、経済的なものよりも、主としてアンデス住民の世界観やシンボル体系に関連するものと考えてきた。たとえば、トウモロコシは祭りや儀礼に欠かせない酒の重要な材料となるため、その栽培の目的は食糧の自給よりも儀礼的な価値に重点がおかれてきたのである。

たしかにトウモロコシだけに注目すればこのような結論に達するのかもしれない。そ

れについてはのちほど検討することにして、高度差利用を別の角度から見ると、ちょっと違った結論が得られそうである。じつは世帯ごとに見たとき、マルカバタで最も大きな高度差を利用しているのはジャガイモ栽培である。それについて大きな高度差を利用しているのは家畜放牧である。前者は標高3000mから4300mあたりまでであるし、後者は主として標高4000mあたりから5000m近くまでの高度差のなかでおこなわれている。

したがって、彼らの生活のなかで中心となるのは家畜の放牧とジャガイモの栽培である。家畜の放牧には毎日家族の誰かがあたらなければならないし、ジャガイモの植え付けや収穫は年に4回もあるからである。これに対してトウモロコシは植え付けも収穫も1回だけである。また、ジャガイモ耕地に対してトウモロコシ耕地はさほど大きくないので、農作業のための時間の大半はジャガイモ栽培のためにさかれているのである。

では、彼らは何のために1000m以上もの大きな高度差の中に4つものジャガイモ畑をもつのだろうか。村びとによれば、「それは、1年中、新鮮なジャガイモが食べられるようにするためだ」という。なるほど、時期をかえて1年に4回も収穫できるので、収穫したばかりのジャガイモを食べることのできる機会はふえる。

しかし、村びとの食事の様子を見ていると、ほかにも大きな理由がありそうである。それというのも、彼らが日常的に食べているジャガイモの大半はブナの共同耕地で収穫されたジャガイモであり、残りの耕地で収穫されたジャガイモの占める割合はきわめて低いからである。じつは4つの共同耕地の大きさは均一ではなく、ブナの共同耕地だけが圧倒的に大きく、残りの3つの共同耕地はかなり小さい。したがって、彼らの食事の中心になるのはブナのジャガイモであり、残りのジャガイモは端境期用のようである。

そこで考えられる、もうひとつの理由がある。それが収穫の危険を分散するためなのである。もともとジャガイモは寒冷な気候に適した作物であるが、そのような高地は作物を栽培するうえでは厳しい環境、すなわち収穫の危険性が大きい環境である。そして、この危険性は高度の増加とともに大きくなる。高地ほど気温が低く、雨量も少なくなるからである。とくに乏しい降雨はジャガイモ栽培に深刻な影響を与える。アンデスではジャガイモは伝統的に自然の降水のみに頼って栽培しているからである。

それでは、このような危険性を回避したり、減少させるためにはどうすればよいのか。その方法のひとつが、大きな高度差のなかで生じる気温や雨量の違いを利用して、少しずつ時期をずらして植え付けることである。具体的には、標高の低いところほど早く植え付け、高地に行くほど植え付け時期を遅らせるのである。実際に、マワイの耕地での植え付けは8月であるのに対して、最も高いところにあるルキの耕地での植え付けは10月末頃と、そのあいだには2～3カ月ものズレがある。

こうして、各家族は生育状態が異なる4グループのジャガイモを、しかも高度をかえて栽培することになる。その結果、たとえば気候異変のときでも、それによる影響は標高によって異なると考えられる。これは病害虫による被害に対しても同様である。した

がって、大きな高度差のなかにジャガイモの耕地を分散させているのは、様々な収穫の危険性を分散させる目的ももっていると考えられるのである。

この点で興味深い共同耕地がある。それは共同耕地のなかで最も高地にあるルキのそれである。名前が示すように、この共同耕地はもっぱらルキと呼ばれるジャガイモ品種が栽培される。そして、このルキこそは数多くのジャガイモ品種のなかでも最も耐寒性に優れ、また病気にも強いことで知られるものである。さらに、くりかえし述べたように、ルキは苦くて煮ただけでは食べられないため、すべて加工して保存食とされ、基本的には食糧が不足するときの貯蔵用のものなのである。

ジャガイモ耕地の分散に関しては、上述した垂直方向のものだけではなく、いわば水平方向のものもある。それは、ジャガイモ耕地の休閒システムである。先に見たように、ジャガイモ耕地の休閒はインカ時代あるいはそれ以前からの伝統であり、今も中央アンデスでは広くおこなわれている。マルカパタでのコヤナ共同体でも、先述した4つのジャガイモの共同耕地をいずれも5つの耕区にわけ、そのうちのひとつだけを使い、残りは休閒している。2年目の耕地にジャガイモ以外の作物を栽培することもあるが、それは耕地全体の一部でしかなく、ほとんどの耕地は休閒するのである。

この結果、コヤナの共同体では毎年、ジャガイモを栽培するためには少なくとも5つの耕区が必要となり、共同耕地は5つの区画にわけられているのである。この区画はケチュア語でムユと呼ばれるが、この5つのムユに各世帯が先祖伝来使ってきた耕地がある。そして、このうちのひとつのムユで、その年のジャガイモが栽培されるのである。

これらの共同耕地の使用に際しては、植え付けにさきがけて重要な仕事がある。ムユのまわりにはりめぐらされた垣根の修復の共同作業である。先述したように、マルカパタの先住民は農牧民といった方がよいくらい、作物の栽培とともに多数の家畜も飼育している。これらの家畜が畑に侵入するのを防ぐ工夫として、先住民は耕区のムユのまわりに石垣や柵などで垣根をめぐらしているが、植え付けを始める前にこれを修復しておく必要があるのだ。

植え付け後は、収穫にいたるまで、それぞれの耕地に共同体の村会で選出されたアラリワと称する番人がおかれる。休閒中のムユはしばしば放牧地として利用されるため、それに隣接する栽培中の耕地へ家畜や害獣などの侵入に注意をはらうためである。ちなみにアラリワはインカ時代もいたことが知られ、ポマもアラリワが耕地に侵入する害獣を追い払う光景を描いている(図6-14)。このアラリワの存在もマルカパタにおける農業の伝統性を示すものであろう。

中央アンデス高地全体を広く見わたすと、ジャガイモ耕地の休閒期間には様々なバリエーションが見られ、10数年もの長い休閒期間をもうけているところもある[Orlove and Godoy 1986]。一方で2年目以降の耕地に様々な作物を輪作する方法もおこなわれている。しかし、いずれの場合でもジャガイモの連作の例はなく、また少なくとも4年間は



図6-14 ポマが描いたアラリワ。インカ時代も耕地の害獣を追い払うアラリワがいた [Guamán Poma 1980 (1613)]

栽培しないという原則も守られている。

さて、それでは、この休閑は何のためなのだろうか。従来の説では地力の回復にあると考えられていたし、私自身も疑問をもたずに長いあいだそう思っていた。しかし、マルカパタでの滞在が長くなるにつれ、従来の説に疑問をもつようになった。プナのような高地では数年くらい休閑しても、そこは草地のままであり、焼畑にできるような地力回復はのぞめそうにないからである。また、十分に地力回復していないからこそ、村びとは燃料としても貴重な家畜の糞を大量に肥料として畑に与えていると考えられるのである。

しかし、アンデスにおける休閑と地力回復のあいだの関係を調査した報告はほとんどない。そこで、ジャガイモ耕地における地力回復の効果を知るために、私自身が休閑地の土壌の分析を試みた。マルカパタのジャガイモ共同耕地のなかから、プナのそれを選び、休閑中の4つのムユ（耕区）の土壌を採取して、土壌の酸性度（pH）、有効態窒素、有効態リン、有効態カリについての分析をした。その結果を示したものが表6-7である。

試料が少ないため、この分析で厳密なことはいえないが、おおよその傾向は知ることができる。すなわち、少なくとも4年間の休閑年数内では土壌養分はジャガイモの栄養素として重要な窒素、リン酸、カリのいずれにおいてもほとんど変化していない。また、休閑が終わる前年の耕地でも、窒素を除く他のいずれの要素はジャガイモ栽培に必要な量にはるかにおよばない。つまり、この結果から休閑は地力回復にほとんど役だっていないことが明らかである。

それでは、ジャガイモ耕地は何のために休閑しているのであろうか。その最大の目的は病害虫の防除にあると私は見ている。じつは、ジャガイモは病害虫に弱い作物であり、とくに連作すると病害虫の発生率は高くなる。その病害虫で最大のものがアンデスではセンチウによるものであり、その有効な駆除策として知られるのが休閑なのである。しかも、「センチウの生息密度の高いときにジャガイモの収量を確実にするためには5年間に1度だけ栽培するようなローテーションが必要である」とされるのである[Hooker 1981]。

このような事実は、いずれも休閑の最大の目的が地力の回復よりも、ジャガイモの病害虫の防除にあることを強く示唆するであろう。もちろん、このような方法では、毎年使われる耕地が全体の数分の1でしかないため、生産性という点ではきわめて低いレベルにとどまらざるを得ない。しかし、このことはまた、アンデスの農民が生産性よりも安定的な収穫を最大の目的にしていることを物語るであろう。

表6-7 休閑地の土壌分析 [山本 1988]

土壌養分の要素	ジャガイモ栽培のための平均値	休閑年数			
		1年目	2年目	3年目	4年目
酸性度 (pH)	5.0~6.8	4.0	4.0	4.1	4.0
有効態窒素 (NO ₃ -N) (mg/100g)	9.0	7.0	2.0	2.0	9.0
有効態リン (P ₂ O ₅) (mg/100g)	17.0	10.0	2.0	2.5	0.5
有効態カリ (K ₂ O) (mg/100g)	12.0	0.0	0.0	0.0	1.5

資料は、それぞれの耕区につき数点ずつ、地表から10~20cmの深さの層から採取した。
なお、分析はFHK改良型土壌検定期(富士平工業株式会社製)をもちいた。

6 家畜飼育

6.1 マルカパタの家畜と放牧

マルカパタの農業が家畜の飼養と密接な関係をもっていることは、これまでの記述からもうかがえるだろう。すなわち、パパ・プナやパパ・ルキなどのジャガイモ栽培では、必ず家畜の糞が肥料として使われ、休閑地には家畜を放牧して地力の回復をはかっているものと見られる。また、トウモロコシ耕地でも刈り跡放牧がおこなわれている。さらに、これらの収穫物の運搬には必ずといっていいほど駄獣が使われ、とくに傾斜の急なアンデスでの収穫物の輸送にはリヤマが欠かせないものとなっている(写真6-22)。収穫したトウモロコシもジャガイモもリヤマの背に積んで家に持ち帰るのである¹⁰⁾。

さて、マルカパタで見られる家畜は、リヤマ、アルパカ、ヒツジ、ウシ、ウマ、ブタ、ニワトリ、クイなどである。アルパカとヒツジは主として採毛用で、リヤマとウマは運



写真 6-22 リヤマによるトウモロコシの輸送

搬用，ウシ，ブタ，ニワトリ，クイは食用である。リヤマ，アルパカ，ヒツジもしばしば食用とされるほか，リヤマの毛も織物に使われる。また，リヤマ，アルパカ，ヒツジの糞は燃料と肥料として，ウシの糞も燃料として使われる。クイはモルモットの一種で，アンデスでは古くから食用として飼われており，マルカパタでもその肉は祭りや儀礼に不可欠なものとなっている。

これらの家畜も，栽培植物と同じように，高度によって，その分布に違いが見られる。とくにアルパカは草地帯のなかでも湿原のようなところに分布が限定される。これはアルパカの足が弱いから，あるいは湿原のようなところにはえる草しか食べないからだとされる。したがって，マルカパタでアルパカが放牧されるのはおおよそ標高4000m以上の高地である。

一方，リヤマは駄獣として，きわめて広い範囲を行動する。草さえあればどこでも移動が可能といわれ，低地部へは標高2000mくらいまで，高地部では標高5000mくらいまでの範囲を移動している。また，ウマが使えないような急な斜面や細い崖道も，1頭につき20～40kgの荷を積んで移動する。したがって，その放牧される高度域も広く，一般に標高3600mくらいから標高4500mあたりの草原やジャガイモ耕地の休閑地である。ヒツジは，リヤマやアルパカと比べると寒さに対して弱いといわれるように [Webster 1973: 121]，その放牧の中心となるゾーンは標高3600mあたりから標高4000mくらいのやはりジャガイモ耕地の休閑地などである。

これらの家畜の世帯ごとの所有頭数は，ミスティについては，すでに表6-4に示したとおりである。ミスティが所有する家畜のうちで，最も所有頭数の多いのはウシで，50戸中27戸が計334頭所有していた。このウシは，もっぱら食用で，しかもマルカパタで消費されるより，クスコ，キンセ・ミルなどの都市部に売るためのものである。ウマも，

半数あまりの世帯が平均2頭以上所有している。それに対して、リヤマ、アルパカはわずかに総計53頭で、とくにリヤマは、プエブロ全体で1家族が2頭所有しているだけであった。このように、ミスティが、リヤマ、アルパカに比べて、ウシやウマを多く所有しているのは、ひとつは家畜管理上の問題があるからだ。すなわち、プエブロ周辺で放し飼いにできるウシやウマとは異なり、主としてプナの高地部で放牧の必要があるリヤマやアルパカの家畜管理は標高3100mのプエブロに居住するミスティにとってきわめて困難な作業となっているからである。

それでは、ミスティが所有するリヤマやアルパカの管理は果たしてどのようになっているのであろうか。これらの家畜管理はミスティ自身はおこなわず、高地部に住むミスティの擬制親族や知人に委託される。たとえば、表6-4中の世帯番号37の世帯はアルパカを20頭、ウシを4頭、ヒツジを12頭所有しているが、この家族が管理するのはウシだけである。20頭のアルパカのうち、12頭はカチカチに住む擬制親族が、8頭はチュンピの知人が、また12頭のヒツジはすべてトゥンコスに住む擬制親族が管理している。これらの集落が、いずれもプナ・ゾーンに位置していることはいままでもない。カチカチやチュンピの家畜管理に対する反対給付として、ミスティは先住民にしばしば塩や砂糖をおくるほか、家畜儀礼の際には儀礼に不可欠なココヤ酒などを提供する。また、これらの先住民がプエブロを訪れた時は、家畜の管理を依頼しているミスティは彼らに食事や宿を提供する。

一方、先住民でウシやウマを所有する者は少なく、中心となる家畜はリヤマ、アルパカ、そしてヒツジである。これらの家畜は、彼らが暮らすプナのような寒冷地でも放牧できるし、これらの家畜の糞が肥料としても燃料としても必要不可欠になっているからである。ただし、所有している家畜はさほど多くはなく、コヤナ共同体では世帯ごとの平均家畜頭数は約50頭である。マルカパタ全体では、後述するように100頭以上もの多数の家畜を所有する世帯もあるが、これらの世帯は牧畜専業あるいは牧畜に特化した暮らしを送っている。このことは、先述したジャガイモもトウモロコシも栽培している世帯では、約50頭の家畜飼育が限界であることを物語っているようだ。

実際に、先述した大きな高度差を利用した農業にくわえて、世帯ごとに放牧もともにおこなうのはかなりの困難をとまなう。まず、家畜は、作物と違って、毎日面倒を見る必要がある。毎朝家屋のまわりにある家畜囲いから家畜を放牧地に連れてゆき、そこで家畜群を終日見張らなければならない。そして、夕方には再び家畜を連れて家に戻る。とくに、牧草が乏しくなる乾季は、家族の一部がアスターナと呼ばれる家畜番小屋に移り住み、そこで数カ月間家畜とともに過ごす。

アスターナは、トウモロコシの作り小屋よりも大きく、その意味では小屋というより副居住地といった方が良いかもしれない。アスターナのあるところは、牧草が乏しくなる乾季でも、雪解け水により湿地状になっていて、家畜の餌になる草が豊かなところ

である。ただし、距離的には家からさほど遠くなく、標高差で約100m、1 kmほどの距離に位置している。

1年をとおして家畜飼育が最も大変な時期が農繁期、とくにトウモロコシの植え付けと収穫時期である。先述したように、トウモロコシ耕地は家から標高差で1000mほど谷を下った低地にあり、そこまで毎日通うわけにゆかないので、家族の大半がトウモロコシの出作り小屋に移り住まなければならないからだ。このため、家畜番は子どもや老人にまかせられることになり、これが1世帯あたりの家畜所有頭数を約50頭に限定させる大きな要因になっていると考えられる。

6.2 牧畜と交換

先述したように、マルカパタの中でコヤナ共同体の先住民は、基本的にトウモロコシもジャガイモも主作物として栽培し、そのうえでリヤマやアルパカなどの家畜飼育もおこなっている。その意味で、コヤナ共同体は農牧複合社会といえるが、マルカパタの共同体のなかには、牧畜専業や農業専業と見られる集落がある。このような集落では食糧だけにかぎって見ても、その一部しか自給できない。では、市場経済の発達していないマルカパタで、不足しているものはどのようにして入手しているのだろうか。

それは、主として交換、とくに物々交換の手段をとおして入手される。共同体ごとに見てゆくと、コヤナとプイカでは、集落レベルで見た場合、いずれもトウモロコシとジャガイモを栽培し、牧畜もおこなっている。先住民についての世帯ごとの家畜所有頭数についての具体的なデータは、今回の調査でほとんど得られなかったが、一例を示しておこう。先に示したコヤナのトウモロコシの共同耕地に標高4300mの高地に位置するマルカラニに住む家族のサラ・チャクヤが見られたが、この家族はマルカラニ周辺で18頭のアルパカ、6頭のリヤマ、15頭のヒツジを飼っている。もちろん、彼らはジャガイモもトウモロコシも栽培しており、この家族はトウモロコシとジャガイモを栽培し、リヤマやアルパカなどの放牧もおこなって生活しているのである。この例に見られるように、コヤナとプイカの共同体では、基本的に世帯レベルで、農業と牧畜をおこない、少なくとも食糧にかんしてはほぼ完全な自給自足体制がとられていると見られる。一方、サワンカイとコヤスーヨの共同体には、牧畜専業および牧畜を中心としている集落が見られる。コヤスーヨの共同体では、標高4300mに近いプナに位置するワラコニは、マルカパタで唯一の牧畜専業の集落といわれ、その住人もとくに牧民、パストーレス (pastores) と呼ばれる。ワラコニは戸数40戸程度の集落で、各世帯のリヤマ、アルパカ保有数は平均200~300頭であるが耕地はまったくもたない (写真 6-23)。また、やはりコヤスーヨの共同体に属し、標高3900mに位置するインカカンチャの住人も平均100~200頭のリヤマ、アルパカを保有しているが、トウモロコシ耕地はほとんどもたず、ジャガイモはパ・ルキとパバ・プナだけ栽培している。



写真6-23 ワラコニの畜群

したがって、これらの牧畜専門ないし牧畜中心の村は何らかの手段で農産物を入手する必要があるが、牧畜を専門とするワラコニ村について見てみよう。ワラコニでの農産物の入手方法は、購入と交換である。購入先はマルカパタではなく、主としてオコンガテである。ワラコニからプエプロまではふつう3日の行程であるが、途中サヤパタ、チキスなどの村に泊まり、プエプロにやってくる。そして、オビスパタからトラックを利用して、オコンガテに向かう。この間、リヤマはプエプロから1～2時間の距離にあるチキスの知人に託してゆく。オコンガテで購入するものは、チューニョ、モラヤ、トウモロコシ、ソラマメ、コムギ、キヌアなどである。これらはプエプロにもちかえったあと、チキスからリヤマをつれてきて、それに積んでかえる。

一方、交換は、トウモロコシやジャガイモの収穫期の5月から6月頃、マルカパタ各地に来ておこなう。ワラコニからはチーズ、肉、獣毛などを持参し、これをトウモロコシ、チューニョ、ジャガイモなどと交換するのである。先に、共同体の領域が、そこに成員権をもつ先住民の生活領域として強く意識されていることを指摘したが、ワラコニの牧民の場合、その交換範囲は所属する共同体に限定されない。このような特異な行動様式は、ワラコニ住民にかぎらない。というのは、マルカパタには、プーノ県カラバヤ(Carabaya)郡のマクサニ(Macusani)やメルガル(Melgar)郡のニュニョア(Niñoa)などの、マルカパタとは異なる地域社会からも、やはり牧民が交換にやってくるのである。

次に、インカカンチャについて見てみよう。その主たる交換先は、標高約3500mに位置し、やはりコヤスーヨ共同体に属しているティルパ(Tillpa)である。この集落の住民は、インカカンチャの住民がコヤスーヨの共同体の高地部のみを利用しているのに対し、主として低地部を利用し、そこでトウモロコシとジャガイモを栽培している。したがって、インカカンチャのチューニョ、モラヤ、肥料(リヤマ、アルパカ、ヒツジなどの糞)とティルパのトウモロコシ、ジャガイモ、ラカチャなどが交換される。

ここで注目すべきことは、これらの物々交換の比率は市場経済における価格とは関係

がなく、慣習的に定められたものであることだ。先に、ワラコニの例で見たように、売って得た金で必要なものを買うのは市場経済のうえにのった方法であり、その点で物々交換とは大きな違いが見られる。インカカンチャの場合、トウモロコシとジャガイモは等量で、1リーブラのコカは1アローバ（25リーブラ）のジャガイモと交換される。また屠畜した1頭のアルパカは2袋のジャガイモと、1頭のヒツジは一袋のジャガイモと交換されることが決まっているのである。もしこれをクスコなどの町の市場で売れば、ヒツジは2000ソーレス、ジャガイモはせいぜい1000ソーレスであるといわれる。したがって、市場経済の価格のうえでは不均衡な交換をおこなっていることになる。

このような例はマルカパタにかぎらず、ペルー北高地のウチュクマルカ [Brush 1977: 250] やチャウピワランガ [Fonseca 1972: 330] などでも報告されている。たとえば、チャウピワランガの場合、家畜飼育に専念する村びととその下方で農業中心におこなっている人のあいだで物々交換が見られる。そして、交換の相手やレートはすでにながい伝統として決まっている。彼らは宿舎と食事を提供しあう親密な間柄として代々つづいており、その関係はヤワシナクイ (yawasinacuy) と呼ばれているのである。

このような不均衡な交換をおこなう理由はヤワシナクイをはじめ、物々交換をする間柄がたんに物と物を交換するにとどまらず、様々な相互扶助を保証する関係になっているからであるとされる [大貫 1978: 726]。マルカパタでも、先に述べたミスティと先住民のあいだでこれに類似した関係がみとめられたが、このほかにも牧民と農民のあいだに興味深い交換が見られる。

それはミンカに見られたような一種の労働と物との交換である。すなわち、牧民や家畜を多く所有する者が収穫期にやってきて、駄獣をつかって収穫物の輸送を手伝う。それに対し、農民は収穫物の一部を提供するという関係が見られる。この場合も、馬10頭で輸送したときは、つねにコストル (costal: 輸送用の袋) 半分の収穫物が与えられる。また、リヤマの場合は10頭につき、リヤマ用のコストル1袋分の収穫物が与えられるのである。

以上見てきたようにマルカパタの場合も、牧民および牧畜中心の村びとと農業を専門にしている村びとのあいだには、何らかの相互扶助を保証する関係があるように思われる。この点で、先にワラコニの牧民が購入のためにプエプロに来るときは必ずチキスの村に宿泊するという事実は興味深い。チキスは、マルカパタの集落のほとんどが自給自足にとどまっているのに対し、交換のために多くのトウモロコシやジャガイモを栽培している唯一の村といわれる。つまり、共同体単位での自給自足体制が強くとられているマルカパタでは、これら2つの集落が、それぞれ牧畜と農業に専門化ないしは分業化している可能性が考えられるのである。

7 食糧の消費

7.1 主食はジャガイモ — 食糧の消費

さて、このようにして得た農産物を彼らはどのように消費しているのだろうか。それを私が1番長く滞在させてもらった家の例から紹介してみよう。例にとる世帯は標高約3800mの高地に住み、夫婦とその子どもが4人の平均的な構成である。そして、もっと高地部でリヤマやアルパカ、ヒツジなどの家畜約50頭を飼い、低地部でトウモロコシ、これらの中間地帯でジャガイモを主作物として栽培している。ジャガイモやトウモロコシの生産量については具体的なデータを得ていないが、ともに家族で消費する以上の収穫があり、これらを物々交換あるいは売って得た金で、砂糖や塩、灯油、衣類など主として食糧品以外のものを手に入れている。

食事は、朝、昼、夜の3食が基本であるが、昼食は家畜番や農作業のために屋外でとることが多い。ただし、朝食も夕食も調理は屋内でおこなわれ、食事もかまどを囲むようにしておこなわれる(写真6-24)。

図6-15は、これら3食の9月における食事の1カ月間の主材料を示したものである。9月はジャガイモの植え付け時期にあっていたので、畑で食事をとる回数が多かった。なお、この図では主食、副食という明確なカテゴリーがないため、飲み物と調味料を除いた食事の主材料すべてがあらわれる頻度を示している。したがって、たとえばチューニョのスープという場合、ふつうはジャガイモや肉なども含まれているが、ここでは主材料となるチューニョだけを数えて計算している。そのため、図に示されている割合は実際に食べられている量とは一致しないが、あくまで全体の傾向を知るためのものであ



写真6-24 先住民の食事風景。かまどは中央の女性のうしろにある

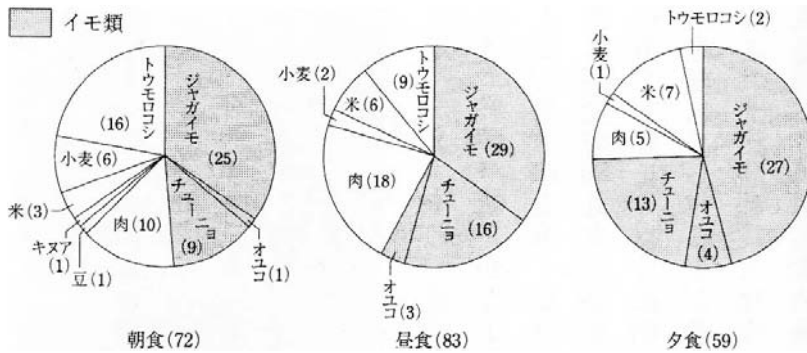


図6-15 マルカパタの食の主材料

る。量的な問題に関してはコメントを加えながら、以下に具体的に見てゆくことにしよう。

この家の食事であらわれた主材料は総計で214あったが、それらの原材料は米、麦、トウモロコシ、キヌア、豆、ジャガイモ、オカ、オユコ、それに肉の9種類にかざられる。90回の食事に214の主材料が出現するのは、ふつう1度の食事に複数の料理を食べるからである。この主材料のうち、米、麦、キヌアを除く食糧はすべてマルカパタで生産されるものである。また、米、麦の出現頻度は高いものの、量的にはさほど大きいものではない。

さて、図で明らかなように、朝、昼、夜の3食とも食事の主材料はほとんど変わらない。そして、各食事とも、ジャガイモとチュニーヨを含むイモ類の出現頻度がきわめて高い。すなわち、朝食で49パーセント、昼食で58パーセント、そして夕食にいたっては75パーセントをイモ類が占めるのである。一方、トウモロコシは朝食で22パーセント、昼食で11パーセント、夕食ではわずかに3パーセントを占めるに過ぎず、イモ類に比べると、その割合は著しく低い。

これを出現頻度ではなく、重量で見れば全食事のなかでイモ類が占める割合はさらに大きくなるはずである。たとえば、彼らの食事に主食と副食の区別はないと述べたが、内容から見て主食的なものはある。それは、パパ・ワイコと呼ばれる料理で、鍋でジャガイモを蒸したものである(写真6-25)。ときに、ジャガイモだけでなく、オカやオユコ、マシユア、チュニーヨなども一緒に蒸されることもあるが、とにかくイモ類が材料である。これが1年をとおしてほとんど毎食供される。たとえば、ここで例にあげた9月の1カ月間のうち、朝食と昼食でともに25回、夕食で26回も供されているのである。そして、このパパ・ワイコにわずかばかりの干し肉とつけ汁としてのトウガラシ汁だけで食事をすますことも少なくないのである。



写真 6-25 ジャガイモを蒸したパパ・ワイコ

7.2 欠かせない肉類

残念ながら、私の調査では食事の内容を量的に示すことはできなかった。しかし、図に示した家の食事に占めるイモ類の割合は8割近くに達するだろうという印象をもっている。そして、それは、この家族のことだけでなく、どこの家でも同じように大量にイモ類を食べている。実際に、上記の世帯のほかにも4世帯で同様の調査をおこなったが、結果はほぼ同じであった。その背景には、どこの家でもジャガイモを中心とするイモ類の栽培に最も大きな労働力をさいているという事情がある。

ここで、気になることがある。それはイモ類の栄養分はほとんどデンプンであり、タンパク質に乏しいことである。そのため、イモ類中心の食事では栄養的に偏ったものになりそうである。それでは、この偏った栄養を何で補っているのでしょうか。それは肉類のようである。図6-15では朝食と昼食で肉の占める割合がチューニョなどより多くなっているが、これは量的にはもっと少なくなる。しかし、この肉の消費に関して特徴的な点は、量的にはわずかでも、ほとんど毎食のように肉が使われ、きわめて出現頻度が高いことである。

肉を使った料理で、最も頻繁に出現するのはジャガイモやチューニョなどと一緒に煮込んだスープである。また、先述したように昼食は屋外でとられることが多いが、そのときも干し肉がしばしば供される。さらに新しい肉が手に入ったときは、それをかまどの熾き火で焼いて食べることもある。これらの食事から見ていると、デンプン質を主体にする彼らの食事のなかで肉は食事に欠かせないものになっていることがわかる。先に



写真 6-26 アルパカの解体

ジャガイモ栽培に家畜飼育が不可欠であると述べたが、これは食事とおして見た消費の点からいえそうである。

しかし、彼らは飼っている家畜を頻りに屠畜して食事に供しているわけではない。むしろ、リヤマやアルパカを屠畜することはほとんどない。前者は荷物輸送に欠かせないし、後者は毛をとるために貴重だからである。ただし、アルパカは動作が鈍く、しばしば放牧中に崖から落ちたり、川にはまって死ぬことがある。このようなときは、解体して毛は織物用に、肉は食用に利用される。そして、この肉は一度に消費しないで、大半は干し肉として貯蔵されるのである（写真 6-26）。

このように家畜をかなり飼っている家でも肉は十分にあるわけではない。そのため、このような世帯ではしばしば農産物を肉と交換する。この農産物のなかでは、とくにトウモロコシを肉と交換することが多い。マルカパタでは大半の農民がトウモロコシよりジャガイモを大量に栽培しているが、ジャガイモはあまり交換に用いない。この点もトウモロコシの特異な価値を示すとともに、肉が彼らにとって貴重なものになっていることを物語るであろう。

肉の供給源として忘れてはならないものがある。それが屋内で飼われるクイである。先述したように先住民の家では大体どこでも10~20頭くらいのクイを飼っている。そしてクイはもっぱら肉として消費されるのである。ただし、クイは日常的に食べられるわけではない。祭りや家に来訪者があったときなど、いわばハレの食に欠かせないものである。クイは小さな動物であり、量的に大きな役割を占めているわけではないが、それでも7月から8月頃にかけての祭りの多い時期はかなり頻りにクイを屠畜し、食事に供



写真6-27 クイの料理

するのである (写真6-26)。

7.3 特異な価値をもつトウモロコシ

先住民の家に滞在し、彼らと食生活をともにして驚いたことがある。それは、彼らの食生活に占めるイモ類の大きさに比べてトウモロコシがあまり食卓に出現しないことだ。ただし、トウモロコシも食べられていないわけではない。図6-15にも示されているように、夕食にはほとんど出現しないものの、朝食では16回も出現している。しかし、トウモロコシが主食として利用されることは少ない。最も多い利用法は、穀粒を石臼で潰し、これをスープなどと一緒に煮込んだサラ・ラワと呼ばれるものである。また、穀粒を土鍋で炒ったカンチャは畑仕事や家畜番の時の携行食としてしばしば利用される。しかし、全体として見ればトウモロコシはとても主食とはいえそうにないほど、量的にはわずしか消費されていないのである。

たしかに、1年をとおして見たとき、もっぱらトウモロコシばかり食べている時期もある。それは、トウモロコシの収穫のために一時的にトウモロコシ畑にある出作り小屋に移り住むときである。このときは、朝も昼も夜も、そして間食にも収穫したばかりのトウモロコシを食べている。ときに物々交換で得たチーズや肉も食べることもあるが、主食はトウモロコシを茹でたモテナなのである。これには、いくつかの理由が考えられる。

まず、収穫時期は新鮮なトウモロコシが食べられる唯一の機会なのである。また、この新鮮なトウモロコシの穀粒は比較的柔らかいので料理がしやすいことも関係がある。さらに、トウモロコシ畑は標高3000m以下の森林地帯に位置しており、燃料となる薪も得やすい。一方、乾燥したトウモロコシの穀粒は固く、とくに高地部では気圧が低いこ



写真 6-28 ラドリージョ

ともあり、調理がしにくい。こうして、高地部でのトウモロコシの調理法は石臼で挽いて粉にしてから煮るか、粒を炒るものとなり、茹でたモテは収穫時期を過ぎるとほとんど出現しないのである。

先にクイがハレのときの食材であると述べたが、どうもトウモロコシもハレの日の食事としての性格をもつようである。じつは、日頃寒冷な高地で暮らす彼らにとって、森林地帯に位置する温暖なトウモロコシ畑は非日常的な世界である。そして、トウモロコシの収穫時期にはマルカパタ以外の地域からもトウモロコシとの物々交換のために多くの人が集まる機会でもある。かつてインカ時代には農作業が祭りでもあったとされるが、このトウモロコシの収穫期はそのような雰囲気を漂わせているのだ。

それを象徴するような料理がトウモロコシの収穫時期には準備される。それは、マルカパタでラドリージョ (*ladrillo*)、アンデスでは一般にウミタ (*humita*) またはウミンタ (*huminta*) と呼ばれるものである (写真 6-28)。これは収穫したばかりのトウモロコシのなかでも、穀粒がまだ柔らかいものが材料になる。この穀粒を石臼などでつぶし、砂糖あるいは塩などをまぜてトウモロコシの皮に包み、これを熱した石のあいだにはさんで焼くのである。これはトウモロコシの収穫時期だけの料理であり、インカ時代も、夏至のあと帝国最大の祭りであった「太陽の祭典」に大量に供されたことが知られている。



写真 6-29 チチャを満した大きな土製の甕

トウモロコシがもっとハレとしての性格を示すものがある。それはトウモロコシから造られる酒，チチャである。チチャ酒は，インカ時代，農作業や祖先祭祀の儀礼，さらに祭りなどに欠かせないものであったが，この伝統がマルカパタでは今も生きつづけている。たとえば，農作業や家の屋根の葺き替えなどの作業で手伝ってくれた人たちには必ずといってよいほどチチャ酒がふるまわれる。また，家族ごとにおこなわれる家畜儀礼や共同体の祭りでもチチャ酒は欠かせない。とくに，4年ごとに村びと総出でおこなわれる教会屋根の葺き替えの祭りでは大量のチチャ酒が1週間近くにわたって村びと全員にふるまわれる（写真6-29）。このチチャ酒の提供によって，祭りの雰囲気盛り上げるだけでなく，共同体の領域をめぐって時に緊張関係におちいりがちなコミュニティ間の関係を緩和する役割も果たすのである。

8 なぜ大きな高度差を利用するのか——まとめにかえて

以上，食糧の生産と消費に焦点をあててマルカパタ村における先住民の暮らしを見てきたが，最も印象的なことは彼らが大きな高度差を利用し，少なくとも食糧に関してはほぼ自給を維持していることであった。それでは，このような大きな高度差を利用した暮らしの目的は食糧を自給するためなのであろうか。しかし，食糧を自給するためだけ

であれば、これほど大きな高度差を利用する必要はなさそうである。

実際に、マルカパタ村の先住民の食事の中心はジャガイモを中心とするイモ類であり、これにリヤマやアルパカ、さらに屋内で飼っているクイなどの肉を食べれば食糧は自給できる。一方、低地部での主作物であるトウモロコシは食糧としてよりも、主として儀礼や宗教上に欠かせない酒の材料として消費される。

そこで、提示した考え方が、大きな高度差利用はアンデスの厳しい環境のなかでの生存戦略のひとつの方法、とくに収穫の危険を分散する方法であった。収穫の危険分散については先に休閒や多様な品種の栽培の例を紹介したが、アンデス高地の生業は2重にも3重にも危険分散の方法を張りめぐらしているのである。

ここで、あらためて指摘しておかなければならないことがある。それは、中央アンデス高地は低緯度地帯に位置しているため気候は比較的温暖であるが、そこが農業をおこなううえで決して適しているわけではないことである。むしろ、農耕限界に近い標高4000m前後の高地は農業をおこなううえで極限状態にあるといっても過言でない。絶対的な気温の低さ、ときに雹や霰をとまなう気候の激変は、しばしば収穫の壊滅的な被害をもたらす。また、アンデス高地は全般的に降雨量が乏しいことに加えて、年によって降雨の時期や降雨量の変動が大きいことも知られている。さらに、農薬をほとんど使っていない先住民にとって病害虫の発生も大きな脅威である。

このような環境や状況のなかで農業をおこなうためには、大きな生産性を目的とするよりも、安定的な生産性を求める必要がある。不作の影響は危機的な状況を当該社会にもたらすと考えられるからである〔木村 1988; Browman 1987〕。そのため、中央アンデス高地の農業の特徴を、木村は「何重にもはりめぐらされたリスク分散システムがめざしているのは利益の極大化ではなく、被害の最小化である」という。また、ブローマンも、「アンデス在来の経済システムは市場経済に特徴的な最大化モデルではなく、安全第一モデルにそったものである」と指摘している。

そして、そのような危機を回避する方法のひとつが大きな高度差を利用して高度によって異なる作物を栽培したり、家畜を飼って自給する暮らしではないかと考えられる。では、大きな高度差利用の何が収穫の危機回避に役立っているのだろうか。

世帯ごとに見たとき、マルカパタで最も大きな高度差を利用しているのは、先述したようにジャガイモ栽培である。それに次いで大きな高度差を利用しているのは家畜の放牧である。前者は標高3000mから4300mあたりまででおこなわれているし、後者は主として標高4000mあたりから4800mあたりまでの高度差のなかでおこなわれている。

つまり、家畜の放牧とジャガイモの栽培だけでマルカパタの先住民は2000m近い大きな高度差を使っているのである。この家畜飼育とジャガイモ栽培の密接な関係については何度も指摘したことがある〔Yamamoto 1982; 1985; 1988〕。ここで、もうひとつ注目しておきたいものがある。それは、ジャガイモ栽培だけでヤクタからプナに至る1000m

以上もの高度差を利用していることである。

それでは、なぜ彼らは1000mもの大きな高度差を使ってジャガイモを栽培しているのであろうか。また、何のために1年に4回もジャガイモを収穫するのであろうか。この4つのジャガイモ耕地での栽培のために、彼らは植え付けに3カ月くらい要するし、さらに収穫にも3、4カ月を要する。つまり、ジャガイモの植え付けと収穫だけで半年近くもの長い期間を要するのである。

これこそは収穫の危険性を分散するためではないか。先にアンデス高地は作物を栽培するうえで厳しい環境、すなわち収穫の危険性が大きい環境であると述べたが、この危険性は高度の増加とともに大きくなる。高地ほど気温が低く、雨量も少なくなるからである。とくに乏しい降雨はジャガイモ栽培に深刻な影響を与える。アンデスではジャガイモは伝統的に自然の降水のみに頼って栽培してきたからである。

このような危険性を回避し、減少させる方法のひとつが大きな高度差のなかで生じる気温や雨量の違いを利用して少しずつ時期をずらして植え付けることだと考えられる。具体的には、標高の低いところほど早く植え付け、高地にゆくほど植え付け時期を遅らせるのである。実際に、マワイの耕地での植え付けは8月であるのに対して、最も高いところにあるルキの耕地での植え付けは10月末頃と、そのあいだには3カ月ほどのズレがある。

こうして各世帯は生育状態が異なる4グループのジャガイモを栽培することになる。その結果、たとえば気候異変のときでも、それによる影響は標高によって異なることになる。これは病害虫による被害に対しても同様である。したがって、大きな高度差のなかにジャガイモ耕地を分散させ、そこに多種類のジャガイモを栽培しているのは、収穫の様々な危険性を分散させる目的をもっていると考えられるのである。

注

- 1) 現在は、クスコからマルカパタまで舗装道路が通じたため定期的にバスも走り、クスコーマルカパタは3～4時間で行けるようになっている。
- 2) 治安状態の悪化のため、1985年には首都リマに非常事態宣言が発せられ、夜間の外出も禁止となった。
- 3) かつては電気もガスも水道もなかったが、今では少なくともプエプロでは電気もガスもあり、インターネットカフェさえ生まれている。
- 4) キンセ・ミルには、かつて飛行場があり、そこでは気象観測がおこなわれていたので、そのデータが利用できた。
- 5) マルカパタの住民の大半はカトリック教徒であるが、マルカパタの低地住民のほとんどではプロテスタントであり、この点でも彼らのあいだにはあまり交流がない。
- 6) 現在（2013年時点）は、日曜日ごとに広場で大きな市がひらかれており、すでに自給自足体制にも大きな変化が生じている可能性がある。

- 7) アンデス農民が多様な品種を栽培する理由には、もうひとつの要因が考えられる。それは、宗教的なものである。一般にアンデス農民は特異な形態をした作物に「特別な力」を認める「ワカ信仰」があり、これも関係しているようである。この点について詳しくは山本 [2009] を参照されたい。
- 8) 現在は、自動車道路の延伸によって、マルカパタでも一部地域では収穫したトゥモロコシをリヤマが運ぶ姿は見られなくなっている。